

令和五・六年度国立劇場歌舞伎脚本募集

入選作品集

入選

佳作

孟蘭盆会再死神

弓削猿丸

.....1

佳作

廓虎五月曙

米原信

.....27

佳作

新平家公達草子
男女縁西海扇

安樂井薫

.....47

佳
作

盂^う
蘭^ら
盆^{ぼん}
会^え
再^{ごにちのしに}
死^{がみ}
神

一
幕
五
場

弓^ゆ
削^げ
の
猿^{さる}
丸^{まる}

孟蘭盆会再死神

ねらい

落語の「死神」に着想を得、その後日譚と見做せる設定とした（作中で、落語にある死神祓いの呪文「あじやらかもくれん、きゅうらいす、てけれつつのばあ」を使用している）。「死神」の嘶において命を失う男の、妻と息子に着目し、息子を主人公とすることで、普遍的な親子の情愛を描く。父と子、母と子、技を伝える師匠と弟子の疑似父子、それぞれの交情を通して、他者と自己への赦しと前進をテーマに据える。

主人公の少年は、素直で優しい性格だが、亡き父親へ消えないわだかまりを抱いており、物語を通じて父との関係を修復する。観客の若年層にはジューナイルとして共感を、中高年層には子どもを応援するような親しみを、主人公に覚えてもらいたい。また、弱い部分を多く持ち、人生の落伍者となってもなお家族のために奮闘する父親も、観客の共感や好感を掴んでほしい。歌舞伎界の十代・二十代の俳優を主役に据え、その親世代の俳優にも役的魅力を感じてもらえる脚本を目指した。

題名通り作中の時季は七月の盆、上演される時季は八月納涼

歌舞伎を想定した。夏らしい幽霊譚を世話物でまとめ、終盤に派手なケレンを盛り込み、夏休み中の若い世代とその親世代の取り込みを意図した。「亡き人を忘れない」ことの大切さと、そうしたいと思う人間性が裏テーマであり、日本の八月らしい鎮魂と、芸を伝えて亡くなった過去の歌舞伎俳優に対する敬意と親愛も意識している。

あらすじ

少年・半太郎は、前年に他界した父・丁助と同職の友人であった大工・甚五郎の通いの弟子。裏長屋に母・おすると二人で堅実に暮らしている。

七月十三日の夕、半太郎は、精霊馬を作りながら母と亡き父の思い出話をする。丁助は、腕は良かったが酒癖が悪く、ことに一年程前から急に羽振りがよくなると、酒量と乱暴が増え、ついにおすると半太郎は逃げ出した。仕立て仕事で生計を立てるおすると半太郎は、やがて丁助の訃報を受け取ったのだった。別れる前の父への反感と恐怖から、顔をよく覚えていないと言いう半太郎。父のことも「お父つつあん」とは呼べずにいる。迎え火を焚いた半太郎の前に、死んだ父が現れる。父は「俺は死

神に騙された」と語り、死神に取り憑かれてから死に至るまでの経緯と、病人を助ける死神祓いの呪文を半太郎に教える。「死神はおめえの仇だ。死神どもを俺に代わって退治してくれ」

十四日、親方甚五郎の家で父の話を聞く半太郎。甚五郎・おもと夫婦は半太郎を気遣いつつ、内弟子にならないかと持ちかける。同日、長屋の稲荷から狐神が現れ、日頃社の掃除をしている半太郎母子を助けようと言う。胡散臭さを感じながらも受け入れる半太郎。

十五日、甚五郎が急な病で倒れ、看病のために半太郎とおすゐが呼ばれる。駆けつけると甚五郎の枕元に死神が座っている。半太郎は丁助から、親方を助ける代わりに母おすゐの命を差し出すよう説かれる。逡巡の後、自分の命を差し出すことを決める半太郎。

死神祓いの呪文を唱えかけた途端、狐神が乱入して正体を現す。狐神を名乗っていたのは本物の父親・丁助で、丁助に化けて半太郎を唆していたのが、丁助の仇である死神であった。丁助が自分や母に向ける真の想いを知り、半太郎は思わず父に「お父っつあん」と呼びかける。

本物の狐神も現れ、半太郎たちは総出で死神集団に立ち向かう。回復した甚五郎が半太郎の精霊馬・精霊牛に、おすゐが

持ってきた丁助の玄能で魂を吹き込み、巨大化した精霊馬・精霊牛が死神たちを叩き伏せ、追い払う。

十六日の明け方、仇敵の死神を馬に括り付けて冥界へ追い返し、丁助は妻子と名残を惜しむ。「今度あ、おれの顔を忘れねえでいてくれよ」「忘れねえよ。自分のお父っつあんの顔、忘れるもんかよ」牛に跨って丁助は、半太郎とおすゐの見守る中、朝陽の中を帰ってゆく。

場 割

第一場 稻荷長屋の場 (十三日午後)

第二場 両国橋の場 (十三日夕)

第三場 甚五郎宅の場 (十四日朝)

第四場 稻荷長屋の場 (十四日夕)

大詰 甚五郎宅の場 (十五日夜から翌朝)

風鈴売り

大工たち (六人程)

死神たち (八人程)

狐神

真の狐神

第一場 稻荷長屋の場 (十三日午後)

役 名

半太郎 十三才の少年。大工見習い。

おすゐ 半太郎の母。

丁助 半太郎の父。半年前に死亡。

甚五郎 大工棟梁。半太郎の師匠。

おもと 甚五郎の妻。

清二 若い大工。半太郎の兄弟子。

仁兵衛 中年の商人。

長屋の住人たち (三〜五人)

町人 (大勢)

幕開くと夏の午後の光。平舞台上手に長屋の外壁、

端に半太郎・おすゐの住まいの戸口。下手に、小さ

くて簡素だがよく手が入って清らかな稻荷社。総て

下町稻荷長屋の態。

ト、半太郎の家から仕立て上がりの着物を持つて

出てくる商人仁兵衛。

仁兵衛 おすゐさん、それじゃ、貰つてゆきますよ。

おすゐ (カゲにて) ええ、お頼み申します。

ト、戸を閉めて下手に向かう仁兵衛。通りすぎる

長屋の住人、馴染みの仁兵衛に声をかける。

住 人 仁兵衛さん。おすゐさんのところかい。

仁兵衛 ああ。仕事が早くて助かるよ。どうでも敷入りに間に合わせたいと先様のお望みで。

住 人 へえ、敷入りなら二日も後だ。

仁兵衛 そうなんだよ。あたしも鼻が高いやね。それじゃ、ごめんなさいよ。

ト、花道に急ぐ仁兵衛。

向うより小ぶりの大工箱を担いだ半太郎。股引に裾からげ。

二人、花道上よきところで行き合い、

仁兵衛 おお、半太郎さん。ちよいと見ない間にまた背が伸びたな。

半太郎 仁兵衛さん、こんにちは。

仁兵衛 今帰りがい。こう油照りじゃあ、通いの奉公もきついだろう。

半太郎 足をお運びくださって、ご厄介でございます。

仁兵衛 なあに、おすゐさんの仕事なら、上がりを見るのも楽しみさ。(ト、行き過ぎかけて) ああ、そうだ。おまえさんのところは、新盆だな。

半太郎 はい。

仁兵衛 切ないだろうが、おつ母さんによくしておやり。

半太郎 —— はい。ありがとうございます。

ト、仁兵衛、揚幕に入る。

見送って、本舞台に向かう半太郎。稲荷社に神妙に手を合わせ、周囲の僅かな芥を払う。

盆が回って、半太郎・おすゐの家の中が正面に来る。本舞台尺高の二重。質素で掃除の行き届いた小ぎれいな一間と土間。正面塗り壁、上手に無地の枕屏風、その陰に二人分の布団。行李。無灯の行灯。小さな棚の上に亡夫丁助の位牌。天井近くに神棚。下手土間に台所、水甕と濯ぎ盥、おすゐの草履。総て半太郎母子の住まいの態。

中で針仕事をするおすゐ。半太郎、家に入る。

半太郎 おつ母さん、帰ったよ。(ト、足を濯ぎ、手拭いを濡らして体の汗も拭く)

おすゐ お帰り半太郎。疲れたろ。もうすぐご飯にするからね。

半太郎 そこで仁兵衛さんに会ったよ。おつ母さんの腕を褒めていた。(ト、台所の茄子と胡瓜を見て) いい艶の茄子だなあ。今夜は田楽かい？

おすゐ 田楽もこさえてやるよ。だけどそれはね、精霊馬にす

るのさ。

半太郎 ああ、……父ちゃんの迎え馬だな。おいらがこさえてやろうか。

おすゐ そうしてもらおうかね。おまえは手先が器用だから、あたしがやるよか巧いだろう。

半太郎 馬に鞍をつけようか。

おすゐ そんなことまでしてくれるのかい。そうさね、お父つつあんはちいつと鈍くさかったからね。乗りにくいほうが喜ぶさ。

半太郎 酔っぱらっておつ母さんをおとうとして、こけてたこともあったつけ。(ト、道具箱から小刀を取り出し、鞍の細工を始める)——おいら、父ちゃんの顔、あんま覚えてねえや。死んじまったときのご面相が、あんまりおっかなかったしさ。

おすゐ ……まだ暑い時分だったからね。日陰とはいえ、めつかるまでに丸一昼夜は経ってたんだ。すつかり、痛んじまってるさ。おまえに見せるのも酷だと思ったけど、でもおまえももう十二だし。お父つつあんにお別れさせずに、焼いちまうのも気の毒だろう。

半太郎 うん。……おいらも、会わせてもらって、よかったと

思う。けどよ、最後の顔だけじゃねえんだ。おつ母さんとおいらを追ん出す前さ、父ちゃんいつも酔っぱらってたろう。水ぶくれした顔で居眠ってるか、鬼みてえな顔で暴れてるかでさ。おいら、まともな時分の父ちゃんの顔、もう思い出せねえんだ。——(鞍を見せ)どうだい、おつ母さん。

おすゐ おまえは本当に細かい仕事が巧いねえ。——お父つつあんだってね、酒浸りになっちまう前は、腕のいい大工だったんだ。調子がよくって、おつむが大雑把で、後先考えないとこが瑕だったけどね、気の弱い、そのぶん性根の優しい人だったんだよ。

半太郎 いいとこのほうが少ねえな。

おすゐ おまえのことだって可愛がってたよ。おまえが生まれて、大好きだった博打から足洗って。

半太郎 「おれが丁助、倅が半太郎、家に帰れば丁半揃う、それで賭場から遠のいた」って、そう言ってたぜ、前に、酔っぱらった父ちゃんが。

おすゐ それで「半太郎」だったのかい？ いやだね、冗談で言ったのさ。あの人、お酒に飲まれると、まともなことを言いやしない。

半太郎 嘘なのかい？ なあんだ、おいらはずっとそう思ってた。

おすゐ 悪い酒さ。もともと、飲めるたちじゃなかったんだ。それが、おまえが七つの年、仕事で幾つか、へまを重ねて、その頃だよ、無理にでも飲むようになってねえ。そんなに気に病まなくていいって、甚五郎の親方も仰ってくださったんだけどねえ。なんせ、気の弱い人だったから。

半太郎 親方は今でも時々言いなさるぜ。元はと言えば、おれがあいつに酒の味を覚えさせたのが悪いんだ、って。

おすゐ 親方にもご迷惑をかけたねえ。だんだん酒屋の払いが増えて、飲み過ぎるから仕事も度々しくじって。そうするうちにやりくりが苦しくなって、あたしとも喧嘩が絶えなくなつてさ。

半太郎 おつ母さんの生傷もな。

おすゐ あたしは慣れっこだったけど、おまえがぶたれるのは辛かったね。だからあの人が飲みに出てくれると、口じゃ文句を言いながら、その実、ほっとしたもんさ。

—— 一昨年の暮れもそうだったねえ。

半太郎 夜明け前から父ちゃんがどっかに逃げちまって、おつ

母さんが金策に駆けずり回つたろ。掛け取りが次々に来て、おいらが代わりに頭下げて。

おすゐ おまえにも苦勞させたよね。掛けをなんとか払い切つたら、一文無しになつちまって。これからどうしようって思つてたら、夜更けにふらりと戻つたあの人が、年明けから妙な仕事を始めてさ。あれにはびっくりしたねえ。半太郎 「いしや」ってな。おいらの手習い道具で、板つきれに下手くそな字書いて。

おすゐ 久しぶりに玄能を手にしたと思つたら、朝からガンガンその表札を打ち付けて、ご近所さんがみんな起きちゃつてさ。

半太郎 客なんか来るもんかつて、おいらたち相手にしなかったな。

おすゐ 世の中わからないもんだねえ。何をどうしたか知らないけど、みるみるお客がついてさあ。それも大店の、お旗本のと、羽振りのいいのばかりでさ。——けどあたしや、怖かったよ。そんな楽におあしが稼げるもんか。あの人はずつかり天狗になつちまって、何を聞いても生返事。遊び歩いて、酒かつくらつて——あの人のお酒癖の悪さにや五年も辛抱したけども、あんなわけのわから

ない暮らしにやあ、三月も耐えられなかったねえ。――
半太郎、おまえ、あたしと一緒に家を出たこと、ほんと
に後悔してないかい。

半太郎　してねえよ。おいら、ぶっ叩いてくる父ちゃんもおっ
かなかったけど、大金持ってへらへら帰って来る父ちゃ
んはもっとおっかなかった。悪いもんに取り憑かれてん
じゃねえかって、気味が悪くてろくに顔なんか見られな
かった。だから、おつ母さんと家を出て、おいらもほっ
としたんだよ。この人たちは皆親切にしてくれるし、
大工仕事を仕込んでくださる親方も、おかみさんも兄さ
んたちも、細々面倒をみてくださるし。今の暮らしが、
おいら、好きだよ。――ほら、出来たぜ。（ト、精霊馬
を見せる）

おすゐ　ああ、上手だねえ。これならあの人も、安心して乗れ
るだろうさ。……ねえ、半太郎。おまえ、なんでお父っ
つあんとおつ母さんが「半太郎」って名付けたか、ほん
とのところは知らないんだね。

半太郎　うん。

おすゐ　じゃあ、覚えておおき。おまえが生まれたとき、お
父っつあん、こう言ったんだよ。「人間、ひとりで生き

られるもんじゃない。周りの人に助けられて、ようやく
一人前になれるんだ。それを忘れない人間になつてく
れ」ってさ。

半太郎　……そうだったのかい。

おすゐ　いいこと言うだろう、おまえのお父っつあんも。結局、
あの人は一人で逝っちまったけどね……じゃあ、迎え火
を焚こうかね。

ト、おすゐ、用意していた焙烙の木切れに火をつ
けて戸口の外へ出る。燃え尽きるまで二人、それ
ぞれの思い入れで手を合わす。（その間に盆が
ゆつくりと回って家の中が見えなくなる）

火が消えると、おすゐが家の中へ入る。去りかね
て、佇んでいる半太郎。

すつぽんから、崩れかけた髷でうらぶれた亡者姿
の丁助が現れる。

丁助　半太郎。

半太郎　（ト、辺りを見回し、丁助に目を留め、ぎよつとし
て）……誰だい。

丁助　おれだよ。丁助だ。おまえのお父っつあんの丁助だよ。
半太郎　お父っつあん？　……ほんとかい。ほんとに、戻って

きたのかい。

丁 助 迎え火を焚いてくれたじゃねえか。ああ、おつ母さんは呼ばなくていい。どうせ見えやしねえ、聞かれもしねえ。おれあ日浅の亡者だからよ、おれとこうして口が利けるのあ、血の繋がったおめえだけだ。(ト、言いながら半太郎の傍へ寄る)

半太郎 そうなのかい。……父ちゃん、こんな顔だったかなあ。

丁 助 おめえ、親の顔を見忘れたか。まあ、無理のねえこつた、死に顔は人相が変わるてえからよ。それより、いいか、半太郎。おれが来たのあ他でもねえ、おめえに仇をとって貰いてえ。

半太郎 仇!? どういうこつた……父ちゃん死んだの、急な病じゃなかったのかい。下手人が居たのかよ!?

丁 助 ああ。病なんかじゃねえ、殺されたのさ。だがよ、相手あ人じゃねえ。おれを殺したのあ——死神だ。

半太郎 死神?

丁 助 去年の大晦日、おれあ首括りの松の下で、死神に取り憑かれちまったんだ。がりがりに瘦せた、貧相な爺いさ。その野郎はおれに医者をやれと吹き込んだ。病人には皆死神が一人ずつ取り憑いてる、そいつが枕の傍に居りゃ

負け、足元に居りゃあ勝ちさ。呪文を唱えて手を二度叩く、そうすりゃ死神は追っ払える、病人は治る、家のもんは札を言っておれに金を渡す。百発百中だ。しくじりは無え。

半太郎 それが、父ちゃんのお金儲けの正体か……けど、なんで

丁 助 おれが欲をかいちまった。大金を積まれてな、枕元に居た死神を、足元にして追っ払った。布団をこうくると回して、奴さんの居所を変えたのさ。ところがそいつが罠だった。その死神こそ、おれに取り憑いた野郎だった。端っから、おれを取り殺そうと狙っていたのよ。おれは奴に嵌められて、危ねえ橋を渡らされた。おれの命の蠟燭の火は、あいつに消されちまったんだ。

半太郎 命の、蠟燭……

丁 助 だからいいか、半太郎。おれの仇は死神だ。お父つあんのお仇討ちと思つて、おめえはこれから、世の中じゅうの死神を、片っぱじから葬り去れ。

半太郎 お、おいらに、そんなこと——

丁 助 出来るさ。おれだつてあの時まで巧くやつてたんだ。この金がありゃあ、おめえとおつ母さんを迎えに行ける。

お父つつあんが悪かった、堪忍してくれ、戻ってきてくれって頭下げるつもりだった。そこを付け込まれちまったのさ。おめえたちにいい暮らしさせてやりたくて、大金に目が眩んじまった。

半太郎 本当かい。

丁 助 大真実よ。いいか、呪文を教えるぜ。「あじやらかもくれんきゅうらいす、てけれつつのばあ」、(ト、手を二度叩いて) ばんばん、だ。言ってみろ。

半太郎 「あじやらかもくれんきゅうらいす、てけれつつのばあ」。

丁 助 ばんばん、を忘れんなよ。二つ目のばんで死神は消えらあ。

半太郎 わかったよ。

丁 助 よし。そんじゃあ、試さしてやる。ついてこい。

半太郎 出掛けんのかい？ どこへ行くのさ。

丁 助 往来さ。死神憑きの二人や三人、すぐめつかるぜ。

半太郎 そ、そんなもん、おいらにゃ見えねえよ。

丁 助 おれがついてりゃ見えるのさ。

ト、丁助、するすると先へ立って花道へ行き、立ち止まって半太郎を招く。

気を吞まれたまま後に続く半太郎。連れ立って向うへ入る。

道具替え

第二場 両国橋の場(十三日夕)

本舞台の上へかけて両国橋の袂の道具。その傍らと下の方にかけて店々が軒を連ね、往来は夕涼みの人と物売りで賑わう。川の向こうは灯りのついた浜町河岸通りの遠見、川には遊び船の影。総て両国橋夕暮れの態。

橋の袂に、風鈴売りが欄干に凭れて立っており、ひどく咳き込んでいる。その足元にほろを纏った老人が蹲り、風鈴売りの顔を見上げている。

ト、丁助と半太郎、向うより出て本舞台を望む。

丁 助 そら、見ろ半太郎。あすこの風鈴売り。足元に汚え爺いが蹲ってやがるだろ。あいつが死神だ。

半太郎 (ト、おっかなびっくり覗いて) ……人と見分けがつかねえや。

丁 助 おれが教えてやるから構やしねえよ。いいか、祓い

てえ死神のな、二間くれえまで近づくんた。

ト、人混みの中を死神の傍へ近づく丁助と半太郎。

丁助 そうして、呪文だ。手え叩くの忘れんなよ。（ト、

半太郎から離れる）

半太郎 あじやらかもくれんきゅうらいす、てけれつつのばあ。

（ト、手を二度叩く）

ト、死神、悲鳴を上げて姿を消す。

風鈴売り、咳が止まり、表情を明るくする。

風鈴売り ……なんだ？ 急に胸が楽になった……

半太郎 ……出来た！ お、おいらにも出来た！

丁助 易いこつたる。これっぱかしだ。こいつを、病人の家
でやれあ金になる。

ト、丁助、半太郎の肩に気安く腕を回す。

丁助 いいかよ、倅。おれは丁助、おめえは半太郎。おめえ
とおれとで丁半揃う。二人が居りゃあ無敵つてこつた。

ト、半太郎、丁助の言葉に引つ掛かるこなし。丁

助、意に介さず、

丁助 さ、行こうぜ。稽古代わりだ、もう二、三人、助けて
やろうぜ。

半太郎 おつ母さんが、心配するよ。

丁助 ちょんの間だあな。すぐ戻れら。

ト、どどん先へ行く丁助。

半太郎、少し躊躇うが、丁助の後を追う。人混み
の中へ分け入っていく丁助と半太郎。

すっぽんより、薄布を被った人物（狐神）がセリ
上がる。水干様の古風な白装束。往來の誰の目にも
見えていない。物言いたげに半太郎を見送って、
再びセリ下がる。

道具替え

第三場 甚五郎宅の場（十四日朝）

常足の二重の座敷、いつもの処に勝手口。正面に暖
簾口、上手に仏壇、下手上部に神棚。甚五郎の座布
団と蓑盆。暖簾口の先は台所や寝間に続く心。戸口
内側に外簾と塵取り。総て大工の親方甚五郎宅の態。
ト、道具箱を抱えてやってくる半太郎。戸口を開
けて暖簾の奥へ声をかける。

半太郎 おかみさん、おはようございます。

ト、甚五郎女房おもと、慣れた心で暖簾から顔を

出す。

おもと ああ半ちゃん。おはよう。今日も暑くなりそうだねえ。
半太郎 はい。水を多めに撒いときます。

ト、道具箱を座敷の隅に置き、箒と塵取り、柄杓
入りの手桶を持って家の前の掃除にかかろうとす
る半太郎。

おもと 半ちゃんや、おまえさん、昨日、迎え火はちゃんと焚
けたかい。

半太郎 はい。それで、しつかり——（ト、丁助が戻ってきた
と言いかけて、口を噤む）

おもと しつかりお迎えが出来たかい。良かったよ。おまえさ
んには、懐かしいばかりじゃないだろうけど、亡くな
りや皆仏様だからねえ。

半太郎 ——はい。

ト、暖簾口の奥から甚五郎が現れる。股引を履い
た着流し、仕事前の寛いだ様子。

甚五郎 おう半太郎。

半太郎 親方。おはようございます。すいません、掃除は、こ
れから——

甚五郎 まあ待ちねえ。いいんだよ。箒はそっちに置いときな。

今朝あな、ちいとおめえに話がある。

半太郎 へえ。

ト、半太郎、甚五郎に促されて座敷へ上がり、下
手に座す。

甚五郎 蓑盆で一服やり始める。
おもとはお茶を淹れに立つ。

甚五郎 どうでえ、仕事の具合は。おいらの見立てじゃ、おめ
えに合ってると思うんだがな。

半太郎 はい。仕事は、面白いです。

甚五郎 おめえ、うちから通うのは、なかなか骨が折れねえか。
半太郎 いいえ、なんてこたありません。たった二人の家だか
らって、おつ母さんが心細くならねえように、通いの奉
公を許してくださって。親方のご親切に、おいらもおつ
母さんも、ありがてえと思つてます。

甚五郎 おめえを特別扱いにして、やつかんでる兄弟子あ居ね
えかい。

半太郎 そんなこと。兄さんたちも、みんな親切にしてくれま
す。

甚五郎 そいならいいんだ。おめえが嫌な思いをするようなら、
何にもならねえからな。

おもと　（ト、茶を持ってきて甚五郎に出しつつ）ちよいとおまえさん。うちの若いのに、そんなみみっちい真似をする手合いが居るとでもお思いかい。清さんあたりが聞いたら臍を曲げるよ。

甚五郎　おいらだつて何も疑つてやしねえよ。みんな気持ちのいい奴らだ。ただ、人間てのあ分からねえもんだからよ。丁助だつてそうだ。おう半太郎、おめえ、お父つつあんのこと、今じゃあどう思つてんだ。

半太郎　どう、つて……。

甚五郎　許してやれそうかい。

半太郎　——へえ。

甚五郎　元はと言やあ、あいつに酒を教えたのはおいらだからよ。下戸だつたあの野郎に、修行と言つて無理に飲ました。あん時酒に馴染ませなきゃあ、溺れることもなかつたろうぜ。だからよ、半太郎。死んじまつたお父つつあんなが出来ねえ代わりに、おめえに仕事を仕込むなあ、おいらの罪滅ぼしつてやつだ。おめえが気にするこた無えんだよ。

おもと　そうだよ半ちゃん。あんた、筋がいいしさ。礼儀もちゃんと心得てる。おすめさんのお仕込みがいいんだ

ねえ。うちの人も、あんたみたいに利発で覚えのいい子に、教えてやれるのが楽しいのさ。

甚五郎　だからな、半太郎。おめえとおつ母さんがその気になりゃあ、おめえ、いつだつてこの家に住み込んでいいんだぜ。ちいっと、考えてみつくんな。

半太郎　——はい。

ト、兄弟子の清二が戸口から威勢よく入ってくる。
清二　親方あ、おはようございやす。おかみさん、おはようございやす。

甚五郎　おう清二。

おもと　清さん、おはよう。ご苦労だね。

半太郎　兄さん、おはようございやす。

清二　おう半公。表に水あ打ったのかい？　なんだか埃っぽいううだぜ。

半太郎　いいえ、まだ——

甚五郎　許せ許せ、おいらが引き止めちまつたのよ。そんな頼まあ、半太郎。

半太郎　へい。

甚五郎　清二、他の奴らあ集まつてんのか。

清二　へい、大方。

甚五郎 そいじゃおいらも行くでしょう。半太郎、おめえも掃除が済んだら後から来い。

半太郎 へえい！

ト、おもと、甚五郎に印半纏を着せ、自分の道具箱を担いだ甚五郎に切り火を切つてやる。

甚五郎、清二を伴つて出てゆき、花道へ向かう。

戸口の外に出て見送るおもとと半太郎。

甚五郎、七三で振り返り、おもとに頷き、半太郎

に笑いかけ（半太郎、ぺこりと頭を下げる）、揚

幕へ入る。清二続く。

物売りの呼び声。

おもとは玄関を入つて暖簾口の奥へ。

玄関前を掃き始める半太郎に、物陰から出た丁助が近づく。

丁助 （ト、甚五郎を見るこなしで）あいつも達者そうだな。

半太郎 （ト、手を止めて）……父ちゃん。

丁助 いい、いい。続けな。おれの姿あ余人にや見えねえ。

おめえが変に思われらあ。半太郎、おめえ、今日の昼飯時と八つ時に、死神退治の稽古に出ようや。

半太郎 え？

丁助 顔を上げるんじゃねえ。

半太郎 ……死神探しは、夕刻につて話だったろ。仕事を終えて、うちに戻つたら、飯の前に抜け出して。

丁助 どうも嫌な目がありやがる。——いや、そうじゃねえ、おつ母さんがな。家を空けると不審がる。だからな、昼間のうちにしようじゃねえか。

半太郎 ……それもそうだ。

丁助 な。そうしよう。おれがおめえの傍についてやれるなあ、今日明日が正念場。盆が引ける明後日のうちにあ帰らにやならねえ。今のうちにたあんと稽古して、おめえ一人でも死神を祓えるようにならねえとな。

半太郎 父ちゃんが居なくつても、死神が見えるようになるのかい。

丁助 ああ。死神と縁のある人間はな、目に映るようになるんだよ。おめえが立派に医者看板を出せりやあ、おつ母さんにも楽させてやれる。

半太郎 それでも、おいら、大工になるよ。

丁助 そんな、つまらねえ……（ト、言いかけて、思い直し）ああ、大工もいいだろうさ。医者もできる大工になりやあいい。そんじゃ、飯時にまた来るぜ。

ト、物陰に姿を消す丁助。

丁助の消えたあたりを見て、寸時思い入れの半太郎。気を取り直し、水を撒き始める。

蟬が鳴き出す。

道具替え

第四場 稲荷長屋の場（十四日夕）

前場と同じ長屋の道具。

長屋の人々の姿。思い思いに行き交い、やがて誰も居なくなる。

斜めになった陽の中、花道を半太郎が帰ってくる。稲荷の社を見周り、手拭いを出し、屋根などを拭う。手を合わせ、踵を返した背中に、声がかかる。

狐 神

（カゲにて）待ちや、その子。半太郎。

半太郎

（ト、足を止め）——どなた、さんですか。（ト、辺

りを見回す）

陰の声

（カゲにて）わしよ。此処じゃ。

ト、社の後ろから、狐の面で顔が半ば隠れた狐神が現れる。

半太郎 （警戒して）——あなたは。

狐 神 わしはこの社を預っておる狐よ。

半太郎 狐——？

狐 神 稲荷大明神のお使いじゃ。おぬしとおぬしの母が日ごと、まめに掃除をしておろう。その礼に、おぬしを助け

てやろうと思うて参ったのじゃ。

半太郎 助ける？ それは、ありがとう存じますが——おいらも、おっ母さんも、礼を言われるためにお世話してたわけじゃありません。

狐 神 それはわしとて承知しておる。

半太郎 ですから、お稲荷さまにお助けいただくなんて——

狐 神 聞け、聞け半太郎。おぬしがこの社に詣でてより今日

ちようど四百八十日。稲荷の神の満願日じゃ。

半太郎 四百八十？ 聞いたことねえなあ。切りよく千日じゃ

ねえんですか。

狐 神 おぬしはまだ若年ゆえ、数も半分より下でよい。名前

も、そうれ、半太郎。

半太郎 それにしたって足りねえや。千の半なら五百日——

狐 神 なんでもよいのじゃ。子どものくせに、細かいことを申すな。

半太郎　なんでえ、神さまのくせに大雑把だなあ。おっ母さん

はどうなんです。もう立派な大人だあな。

狐　神　それなら二人で半分じゃ。二人合わせて千日満願。

半太郎　言ってることが適当じゃねえですかい？

狐　神　よいよい、我ら狐は年増の女性を好むでな。

半太郎　（ぎよつとして）何ですって？

狐　神　勘違いするでない、何も助平なことなど思っておらぬ

ぞ。おぬし、わしが稲荷の使いを疑っておろう。語って

きかすゆえよく聞け。ええ、昔、後小松帝の明徳年中、

一人の老いたる命婦あり、深く稲荷を信じ、日々参詣す。

この命婦の飼いたる野狐、参詣の折、必ず先へ社壇へ来

たりて命婦を待ち、社人も、狐の来たるを見て命婦のや

がて詣でるを知る程なり。命婦も年老い世を去りて後は、

狐を養ふ者も無く、年経て死にしを、人憐みて本社傍

に埋め、社を建てて祀った。これ、狐を稲荷の使とする

起因なるべし。よって、我らは皆女人を慕う。年嵩なれ

ば猶のこと。

半太郎　おっ母さんはそんな年寄りじゃあねえですよ。

狐　神　左様左様、いまだ水気が残っておるわ。おぬしの母は、

しわしわの媼になるまで生きるがよい。そのためには、

一粒種のおぬしの身に災いあらば障りとなる。故に、わ
しがおぬしをが守護してやる。おぬしの命と行末は、お
ぬしだけのものではない。

半五郎　そいつあ……ありがとうございます。

狐　神　うむ。

半五郎　おいらは、何に脅かされるってんですか。

狐　神　怪しき者じゃ。冥府の臭いが鼻につく。

半太郎　冥府……？　あの世ってことですかい。

狐　神　そうじゃ。おぬしやおぬしの母の身を、あちらへ引き

ずり込もうとしているやもしれぬ。盂蘭盆会は冥府の岩

戸が緩むゆえ、不心得者も跋扈しおる。

半太郎　……大丈夫ですよ。幽霊なんか怖かねえし、おいら

にや、死神退治の呪いがありやす。

狐　神　油断するなよ。瘦せても枯れても神は神。

半太郎　でも、お稲荷さまもついてくださる。

狐　神　左様。じゃによつて、身を慎んで、めしを食え。蚊遣

りを焚いて、よく眠れ。

半太郎　はい。

狐　神　おぬしは、理屈っぽいが、良い子じゃの。

ト、半太郎、ぺこりと礼をして家に入る。

半太郎 (カゲにて) おつ母さん、帰ったよ。

おすゐ (カゲにて) ああ、お帰り。今日はちよいと遅かったね。

ト、狐神、半太郎の家の戸をじつと見、母子の声に耳を澄ませ、思い入れ。

道具替え

大 詰 甚五郎宅の場 (十五日夜から翌朝)

前場と同じ甚五郎座敷の道具。

甚五郎が座敷の布団に寝かされ、時折苦しげに呻いている。枕元に座り、甚五郎の顔の汗を拭く心配顔のおもと。若い大工たちが膝を揃えて甚五郎を囲んでいる。

ト、向うよりバタバタにて息せき切つて駆けてくる半太郎、その後に遅れて走る、風呂敷包みを背負ったおすゐ。おすゐを氣遣つて並走している清

二。

戸を開けるなり半太郎、

半太郎 親方! —— おかみさん! (ト、もどかしく座敷に上

がる)

おもと ああ半ちゃん。すまないね、あたしの使いで今日は遠くまで行つてもらつたのに、また呼び出しちまつてさ。

半太郎 そんな! そのぶん早く帰してもらつて——そしたら、清二兄さんが。

ト、言う間におすゐと清二も追いついて中へ入る。
おすゐ おかみさん、どうも親方が、とんだことで——

おもと ああすみませんねえ、おすゐさん、驚かしたでしょう。うちの人が急にこんなことになつちまつて。うちの若いのは一人もんばかりで、女手が無いもんだから、甘えちまつて、堪忍しておくんない。

おすゐ 何を言うんですよ、大恩ある親方の一大事じゃありませんか。あたしでお役に立つんなら、何でも仰つてくださいな。なんだか、氣が動転して、そこらのものをあれこれ掻き集めて来ちました。(ト、風呂敷を解く。

中から晒や吸い飲みや、こまごまと現れる。使い込んだ玄能や、胡瓜と茄子の精霊馬まで入っている)

おもと 助かりますよ。風邪ひとつ引いたことない人で、うちらや看病道具も碌に無くて。普請中に急に顔色を変えたとかで、戸板で帰つてきましてね。下手に動かさないほ

うが いいだろうってんで、此処にこうして寝かしてますのさ。

半太郎 お医者は。

おもと なかなか掴まらないんだよ。藪入り前でどこもかしこもてんでこ舞いさ。おすゐさん、すみませんが、その清二も、他の若い衆も、親方抜きの実質仕事で、今日はいつもの二倍は働いてましてね。おまんまもやりたいし、休ませてもやりたくて。ここでこうして張り付いてても、何が出来るとってわけでなし。

おすゐ そうでしょうとも。ご心配も無理ないけれど、休めるときに休まなくっちゃ。

おもと ありがとう。半ちゃん、おつ母さんをお借りするよ。うちの人を見ててもらえるかい。その暇にあれこれ片付けちまうからね。何かあったら呼んどくれ。さ、あんたたちも。

ト、おもとに促され、若い大工たちとおすゐが共に出てゆく（台所へ向かう心）。

急にがらんとした座敷へ、入れ替わりにふらりと現れる丁助。

丁助 —— 気の毒だなあ、甚五郎。こんなになっちまって。

半太郎 父ちゃん、死神は。

丁助 ああ居るぜ、そこに居やがる。そうれ。

ト、丁助が半太郎の肩にポンと手を置くと、寝てゐる甚五郎の頭の傍に死神が現れる。

丁助 見えるだろ。

半太郎 —— 見える、けど、いけねえよ、あいつ、お、親方の、枕元に居らあ。治せねえよ、ど、どうしよう。

丁助 慌てるな。兄さんたちを四つたり呼んで、布団の隅を持たしてな、おめえの合図でくると回せ。甚五郎の足があつちを向いたらすかさず「てけれつつのばあ」だ。それでおめえの親方は助からあ。

半太郎 けど、そ、それじゃ父ちゃんと同じ道じゃねえか。

丁助 いいか、まずあの死神と甚五郎の悪縁を切らなきゃならねえ。切ってからなら五分と五分、あいつは誰かの命の蠟燭をこちに寄越せと言うだろう。そしたらおめえ、—— おつ母さんのをやると言え。

半太郎 そ、そんなこと出来ねえよ！

丁助 親孝行より師匠の恩だ。おれの命を遣れるもんならおれが代わってやりてえが、生憎おれあ魂無^{タマ}しだ。おめえがこんだけ世話になって、おすゐのやつもウンと言わあ。

親方さまが長らえるならあたしの命を差し上げます、どうぞ持っててくださいましって、おっ母さんなら言うだろう。そういう女だろう、ええ、違うか!?

半太郎 ち、違わねえ。おっ母さんなら喜んで親方の代わりになるだろうさ、けど、だけど、おいらあ——

丁助 甘ったれんな! 半太郎、てめえも男だ、覚悟を決めろい。親方の恩義に報いさせるも、息子のおめえの親孝行だ。忠女賢婦を名乗らして、閻魔の庁に送ってやんな!

半太郎 ——わかったよ。

丁助 了見たか。

半太郎 布団を回そう。

丁助 それでこそおれの倅だ。

半太郎 けど、おっ母さんは死なさねえ。

丁助 ——なんだって?

半太郎 代わりに差し出す蠟燭が、おっ母さんのであるもんか、おいらの命をやるんだよ。

丁助 半太郎——

半太郎 親方は助ける、おっ母さんも救う。死ぬのはおいらで充分だ。親方の命の値打ちにあ吊り合わねえけど、寿命

の長さであの死神も、どうにか承知をしてもらう。さあやろう。(ト、奥に向かって) おかみさん! おかみさん!

おもと (どたどたと走ってきて) なんだい半ちゃん、うちの人がどうしたい!?

ト、おもとの後ろから清二や若い大工たちとおすゐも詰めかける。

半太郎 ご安心を、親方はお休みです。兄さん方、若輩者の身で相すみません。お力を借りたいお願いがあります。おいらの言う通りにしてください!

ト、清二たちに手早く説明するこなし。

若い大工たち、戸惑いながらも頷いて、甚五郎の寝ている布団の四隅を掴み、半太郎の合図を待つ。脇で不安げな面持ちながら、見守るおもととおすゐ。

半太郎 いいですかい、——ひの、ふの、み!

ト、大工たちが甚五郎ごと布団を持ち上げ、くると反転させる。

すかさず呪文を唱える半太郎。

半太郎 ——あじやらかもくれん、きゅうらいす! てけれっ

つの――

狐神 待ったア――！

ト、狐神が突如室内に駆け込む。その場の全員が見て驚く。

半太郎 お狐さま！

丁助 なんだてめえは！

狐神 その子の親父さ！

半太郎 なんだって！

狐神 半太郎、おれだ！ おれがほんとの父ちゃんだ！ その

いつの正体は死神だ！ おれに憑いてた張本人さ！

半太郎 死神？ お、おめえが……父ちゃんを取り殺した、死神

神だって！

丁助 ――ええ忌々しい、往生際の悪い野郎だ。もうちっと
だったのに。

ト、丁助、扮装を解き、痩せた老人姿の死神の本性を現す（以降「死神」と表記し、顔を隠していた狐神を「丁助」と記す）。

途端にこの場に居る全員に死神と丁助の姿が見えるようになり、驚きの声上がる。

おすゐ ――あんた！

おもと 丁助さん――！

半太郎 と、父ちゃん……どうして、……端から……？

丁助 おうよ。この新盆に、懐かしい娑婆に戻ってきたら、

おめえが死神に取り憑かれそうになってるじゃねえか。けど、野郎はあれでも神様だからな、亡者のおれにやあどうにも出来ねえ。手えこまぬいていたらよう、お狐さまが力を貸してくだすったのよ。おめえとおすゐが長屋のお社を日頃大事にしてるだろ。そのご褒美だと仰せでな。

半太郎 ありがてえ――もったいねえ。

死神 丁助、久しいなあ。てめえをうまく躍らせて、思い通りに罠に嵌め、まんまと手柄は貰ったが、殺した親父の姿に化けて、息子の命もおれのものと、死神仲間と丁半賭けて臨んだ勝負がこのざまか。欲をかいちゃあ、いけねえな。

丁助 この野郎――

半太郎 どうして父ちゃんを狙ったんだ。

死神 何、誰でもよかった。てめえに才が無えくせに欲深え野郎だったらな。足りねえおつむで考えようが、その実こっちの思うがまま、もがき回って落とし穴。そのじた

ばたが面白え。おれたち死神の暇潰しさ。

半太郎 この野郎——

丁 助 止せ半太郎！——そいつが言うのはほんとのことさ。
おれあ実際大馬鹿だった。けどなあ、親父のおれは大馬鹿でも、おれの息子は出来た坊主だ！ たった一人の倅まで、てめえら下衆に目えつけられて、のうのう死んでいられるか！

半太郎 ——お父つつあん！

死 神 吼えるな負け犬。亡者ごときに何が出来る。

丁 助 言つたら、お狐さまがついてるってな！

ト、丁助の合図で本物の狐神が現れる（以降、この真の狐神を「狐神」と表記する）。最前までの丁助に似た格好だが、衣はより上等で、風格が漂う。

狐 神 （半太郎に笑いかけ）わしが真の稲荷の眷属、鳥居の数を重ねた者じゃ。おぬしと母の氣遣い、日頃嬉しく思うておったぞ。それゆえに、おぬしと母を救わんがため、父に力を貸したのじゃ。我が靈力を注いだゆえに、見た目が狐に近づいたがの。

半太郎 ——ありがとうございます！

死 神 （せせら笑つて）尻に尾のある毛むくじらが、偉そうにぬかしやがる。使いつぱしりめ。片腹痛えや。おれは痩せても神だわえ。同胞、出あえ！

ト、先の死神に呼応し、仲間の死神たちがわらわらと現れ、半太郎たちを襲おうとする。

おすゐ、悲鳴を上げるおもとを庇い、ハツとしたこなしで、傍の風呂敷包みから玄能を取り上げて胸の前で握りしめる。

死 神 多勢に無勢というやつだ。諦めて、てめえら全員喰われてしまえ。

おすゐ （激昂して）ふざけんじゃないよ。うちの人取り殺してくれやがつて——うちの人は馬鹿だったけど、悪い人間じゃなかったよ！

丁 助 おすゐ——

おすゐ これはこの人の玄能だよ！ これで打つてことは、この人が叩くのと同じだよ！ 思い知れ、こんちくしやう！（ト、玄能を振りかぶって近くの死神に打ち掛かる）

半太郎 おつ母さん！

狐 神 コン畜生は余計だわ。

ト、神通力で死神を牽制する狐神。

若い大工たちも立ち向かうこなし。

死神が離れて少し回復した甚五郎、上体を起こす。

甚五郎 おい、おもと！

おもと おまえさん！（ト、甚五郎に駆け寄り、背を支える）

甚五郎 おれもおちおち寝ちゃいられねえ。清二！ 鑿を出せ。

おもと！ その精霊馬を寄越してくんな。おすゐさんの風呂敷から出てる、胡瓜の馬と茄子の牛だよ！

清二 へい！

おもと あいよ！

半太郎 親方！ 何を――

甚五郎 鬼に金棒、地蔵に錫杖、甚五郎には鑿ってな！ おすゐさん、その玄能を貸してくださいえ。

おすゐ はい！

ト、甚五郎、鑿と精霊馬、玄能を受け取って、死神を睨む。

甚五郎 よくも丁助を手にかけてやがって。目にももの見せてやろうじゃねえか。

ト、甚五郎、丁助の玄能で鑿を打ち、胡瓜の馬に目を彫り入れる。

途端、馬が嘶いて、身震いをするともくもく膨らみ、本物の馬の大きさになり、死神たちを蹴散らし出す。

甚五郎が茄子の牛にも目を入れると、これも実物大の黒い牛に化して頭突きで死神を追い散らす。逃げ惑い、或いは抵抗する死神たちに応戦する狐神と大工たち。

おもととおすゐは甚五郎を庇うかたち。

その三人を守るこなしで居た丁助と半太郎。

頃合いを見て、丁助、半太郎の肩を片腕でがっきと抱き、もう片腕を前に出す。

丁助 半太郎！ 手を出せ！ あじやらか、もくれん――

ト、半太郎、意図を飲み込んで、片腕を差し出しつつ、呪文を唱える。

半太郎 きゅうらいす！

丁助 てけれつつの！

兩人 ばあ！

ト、片手ずつの手をばんばん、と正面で打ち合わせる父子。悲鳴を上げて消える死神たち。

一人だけ、丁助に化けていた死神だけ踏みとど

まって耐えている。

狐神 同じ死神に二度は呪文が効かぬのよ。しかし動けぬそのうちに、そら、その馬の背に縛り付けて、冥府へ送ってやるがよい。仲間内に恥を晒せば、百年は出て来られまい。

ト、狐神が注連縄を取り出し、それを使って若い大工たちが死神を捉えて縛り上げ、馬の背に括り付ける。そのまま、取り囲んで表へ出す。

狐神、牛に別の注連縄で鼻輪をかけ、後から表へ引いていく。

狐神の合図で馬が走り出し、悔しがる死神諸共揚幕へ消える。

見届けに外へ出た半太郎、空の明るさに気がつく。

半太郎、家の中へ引つ込んで、

半太郎 夜が明けらあ。――藪入りだよ、お父つつあん。今日は、日が暮れるまで、居られるんだろ。

おすゐ あんた――

丁助 おれも、おめえたちと一緒に、居てえんだけどな。

狐神 この者は、亡者に許される以上の力を借りたのでな。その分、日数が一日少ない。

丁助 もう、帰らなきゃあ、いけねえのよ。

半太郎 帰るって、何処へだよ。お父つつあんが帰るのは、おいらとおつ母さんのところだろ！

丁助 すまねえ。すまねえな、半太郎。父ちゃんな、生きてるうちに、そこに気づきやあ良かったんだ。面目ねえ。

馬鹿な亭主で、許してくれ、おすゐ。

おすゐ 本当に、馬鹿だよ、おめえさんは――

丁助 甚五郎。おめえにも、済まねえ。世話をかける。半太郎を、よろしく頼むよ。

甚五郎 ったりめえじゃねえか。頼まれなくったって、半太郎はおいらが一人前の大工にしてみせらあ。丁助、おめえは、死んでも馬鹿だが、おいらの達^{ダチ}だ。

ト、甚五郎と丁助、目顔で領き合う。

甚五郎 おもと。それから、おめえたち。今日は藪入りだ。奥へ行つて、寝直そうぜ。とんだ庚申会になっちまった。

ト、甚五郎、おもとに目配せし、半太郎たち一家を水入らずにしてやる心。

おもと、心得て大工たちを指図する。

おもと ほんとだね。さあさ、あんたたち、ご苦労様だったね。帰りたい者はうちへ帰んな。そうでなきゃあ、中へお入

り。その布団、畳んじまってくれるかい。

ト、甚五郎、おもとの肩を借りるようにして奥へ入る。大工たちも続く。

狐神 刻限じゃ、丁助。

丁助 —— へい。

ト、丁助、表へ出る。

半太郎とおするが後を追って出る。狐神は牛を脇に、七三に立っている。

狐神 この牛に乗ってゆけ。我は社に戻るとしよう。

丁助 ご厄介に、なりやした。

おする お助けくださり、ありがとうございます。

半太郎 ありがとうございます。

狐神 なあに、我ら狐神は、年増の女性にょしょうを好むでな。

半太郎 あつ。

ト、狐神、にやりと笑ってすっぽんに消える。

丁助、半太郎に向き直って、膝を折り、顔を突き合わせる。

半太郎 (照れて) なんだよ、お父つつあん。

丁助 おめえにおれの面あ、ようつく見せておきてえんだ。

今度あ、忘れねえでいてくれよ。また来年も来るからよ。

ト、丁助、立ち上がり、不格好に牛に乗ろうとする。

半太郎とおするが駆け寄って助けてやりながら、忘れねえよ。自分のお父つつあんの顔、忘れるもんかよ。待つてるよ。おつ母さんと一緒に、待つてるからよう。来年の盆も、真つ先に帰ってきてくれよ。

ト、丁助、ようやく牛に跨り、おすると半太郎を見下ろして笑う。

丁助 ありがてえ。そんじゃあ、——達者でな。

半太郎 お父つつあん！

ト、牛がのそりと歩き出し、背の上でぐらぐらと揺れる丁助。何度も振り返って半太郎とおするに手を振り、やがて揚幕に入る。おする、朝の光が眩しいこなしで、

おする まだ、見えるかい、半太郎。

半太郎 見えてるよ。こっち向いて手を振ってらあ、あんなに身を乗り出しちゃ、危なっかしいや。まだ見えてる。まだ……まだ……ああ……(柝の頭)——消えた。

ト、そのまま名残惜しげに東の空を見つめる半太郎とおする。朝の光が二人を照らす。

キザミにて
幕

弓^ゆ
削^げ
の^の
猿^{ざる}
丸^{まる}
東京都在住

佳
作

廓くるわ
の
虎とら
五さ
つ
月き
の
曙あけぼの

二
幕
四
場

米まい
原ばら

信しん

廓虎五月曙

ねらいとあらすじ

歌舞伎における義太夫狂言の新作を書きたいと思った。あれこれと題材を考えるうちに、曾我十郎祐成の立廻りを描きたいと思い至った。しかしこれには黙阿弥の「夜討曾我」という先行作があるため、虎御前との恋模様を軸に据え、さらに五郎・少将の恋仲も加えることにした。歌舞伎における義太夫狂言の技法から、物語やクドキなど自分が知っている限りの演出を盛り込み、擬古典に仕上げた。最後は派手に締めたこともあり、屋体崩しの演出を盛り込んだ。娯楽作になったと自負している。あらすじは曾我物の世界に沿っている。

序幕第一場、大磯廓見世先。傾城・虎御前に横恋慕する仁田忠常の郎党が下世話な話をし終わると、曾我十郎祐成が恋人の虎御前に会いに来て、化粧坂少将の手引きで仁田を押し退けて虎御前と会う。後を追ってきた五郎時致は、工藤祐経を討つ仇討ちへの出立は明日なのに女遊びとはと怒り、恋人・少将の手引きで離れ座敷へ忍び込む。

序幕第二場、大磯廓離れ座敷。祐成が執拗に虎御前に酒をす

すめ、いちゃついているところに少将が現れ、仇討はどうしたと聞くが、祐成ははぐらかす。ここに怒った時致が乗り込み、兄祐成と切り合うが、扇一本で応戦する祐成に敗れ屈辱のあまり切腹しようとする。それを祐成は止めて、頭を冷やせと徳利の中身を浴びせる。中身は酒でなく水だった。祐成は仇討に先んじて最後に虎御前と会い、連座を避けるため別れの水盃を試みていたのだ。虎御前は同じ盃ならなぜ夫婦の固めの盃をして、水盃で一時は別れるともいずれば共に死ねと言わないのかとなる。納得した祐成は虎御前と祝言の盃をあげ、時致・少将も夫婦の盃、そして泣く泣く水盃を差し交わす。妻の形見に祐成は松の枝、時致は盃を持って仇討へ旅立つ。あとから様子を窺っていた仁田忠常が、祐成への腹いせに殺そうと追いかける。

二幕目第一場、富士野松ヶ瀬。首尾よく祐経を討った兄弟だったが、逃亡中にはぐれ、祐成は軍兵をあしらいつつ松ヶ瀬の松林まで来た。そこで御所五郎丸と出くわし、時致がすでに囚われたことを知る。五郎丸と組討に争ううち、祐成は仁田に背中を切られて深手を負う。これまでと悟った祐成は、虎御前に会いたかったと伝えるよう五郎丸に頼み、潔く首を打たれた。

二幕目第二場、大磯廓離れ座敷。祐成最期の顛末は虎御前の夢であった。とはいえあまりの生々しさに虎御前が嫌がついて

ると、虎御前と少将に話があると五郎丸と仁田が現れる。五郎丸が語ったのは、夢で見た祐成最期の一部始終で、正夢であったのだ。虎御前と少将は、こんな辛い目に遭うならどうして兄弟は侍に生まれたかと嘆く。それを気にせず女房になれと口説く仁田。虎御前は辛抱たまらず仁田を切りつけ、座敷を軍兵が取り囲む。虎御前と少将があしらいかねていると黒雲が走り、雷雨が降ってくる。まさしく死んだ祐成の涙だと感じた虎御前は、妖術でもなんでも授けて助けてほしいと願う。その願いに応えて祐成は虎御前に取り憑き、仁田を踏み殺し、大虎を顕現させる妖術で座敷を潰してしまうのだった。

序幕第一場 大磯廓見世先の場

本舞台一面、朱塗りの廓見世。上手寄りに大暖簾。

すべて吉原よろしく、大磯廓見世先の体。ここに仁

田忠常の郎党四人、侍の形にて立ち話をしている。

廓の騒ぎ唄にて幕開く。

郎党イ なんといずれも。このところの長雨もぴたりと止み、

関東の万歳を祝う良き日和でござるな。

郎党ロ いかさま。鎌倉殿の武勇を誇る富士の裾野の巻狩りを

控え、かく清々しき月夜はこれ吉兆の印。

郎党ハ 我が君仁田四郎殿には、天下泰平の傾城買い。この大

磯の廓に名高き、虎御前を相方とは。

郎党ニ 明日よりは巻狩りでしばらく遊びもかなわぬゆえ、今

宵はさぞかし長居と思えば、はてさて羨ましい儀でござる。

郎党イ 何はともあれご同輩、我らも内へ。

皆々 くりこみましようか。

ト、騒ぎ唄になり、郎党四人暖簾口へ入る。竹本
になり、

へ五月雨の晴れ間に漏るる月影も、さやけさ隠す頬被

り、腰の白扇頼みにて曾我十郎祐成は、富士の山す
そ死出の山からん先に虎御前に、逢わんと人も大
磯の廓へ忍び来たりしが

ト、向うより曾我十郎祐成、浅葱に千鳥の着付け、
紫の頬被りにて顔を隠し出で来たり、

祐成 富士野への出立明日に迫るに、情を通ぜしお虎に逢い
たさ。大磯までも飛んで来るはほとほと呆れし我が振る
舞い、さりとて帰るも勿体無い。一目なりともあの内へ、
そうじゃ。

へ行かねばならぬ恋の門、大暖簾を差し覗き

ト、祐成、本舞台へかかり、暖簾口を覗く。

祐成 こりや、誰ぞいぬかや。

新造 アイアイ。

ト、振袖新造一人、声あつて暖簾口より出る。

新造 なんぞご用でござんすか。

祐成 お虎へ取り次いでくりやれ。

新造 おあいにく、今宵は虎御前さまとは遊ばませぬぞえ。

祐成 そりやまたなぜに。

新造 サ、鎌倉のお侍がお客じゃわいの。

祐成 なに鎌倉の侍が客じゃ、そんならわしとて同じ客。そ

の侍に会わせい、わしが話をつけてくりよう。

新造 ご勝手なこと言わんすな。

祐成 色に逢うのに、どこに勝手があるものぞ。

へ暖簾引き分け入らんとすれば

ト、化粧坂少将、傾城の姿にて暖簾口よりつつと

出で、

少将 エエ騒々しい、門口で騒ぎゃんな。

へと止める太夫の顔見てびっくり

祐成 ヤ、そなたは弟の想い者、化粧坂の少将太夫。

少将 そうおっしゃるは祐成さまか、ここへはどうして。

祐成 どうしてとは野暮なこと、お虎に逢いに千里を走り。

へ思い詰めたる胸の内、隠れし羽の身に添うて万里の

宙も飛ぶごとく

祐成 取り次ぎくりゃれ、少将殿。

少将 お安いことござんす。お虎さんもこのほどより、こ

なたに逢いたいというて気塞ぎのするご様子。ちゃつと

逢うてやってくださいな。

祐成 とはいえ今宵は先客の。

少将 なに、力に物言うお侍、阿呆に仁田の四郎さまじゃ。

いずれへなりと退かしましよう。

祐成 そりゃ仁田殿にはあいすまねども、有難茄子ではある

わいの。

少将 さあ、わしと一緒にござんせいなあ。

へ手引慕いて祐成は、廓の内へ入りにける

ト、祐成、少将とともに暖簾口へ入る。新造もつ

いて入る。

へ折しも兄の行方を追うて、鉄砲玉の五郎時致

ト、向うより曾我五郎時致、黒の着付に大小差し

にて駆け来たり、キツと見得。

時致 今朝より兄者は行き方知れず、方々訪ね歩いたにどこ

にもいねえからはコレ、この大磯の廓に入り込み、虎御

前とぞつとしねえ睦言に極まった。イデ踏ん込んで、連

れ帰るべえか。

へ連れ帰らんと荒立つところへ

ト、本舞台へかかる。少将暖簾口より出る。

少将 マア時致さま、おなつかしゅうござんす。

時致 コリヤ少将か。二度と逢うまいと思うたに、ここで逢

うとは。

少将 恋の因果でござんしよう、わしや逢いとうて逢いとう

て、やきもきしていたわいなあ。

時 致 そりゃあ逢うたは嬉しいが、そなた、兄者人を見てい
ねえか。

少 将 祐成さまならつい会うて、今はお虎さんとたったのふ
たり。

時 致 なに、そんならやつぱり虎御前と。

少 将 離れ座敷で遊んでじゃぞえ。

時 致 この期に及んで遊びたあ、ますます連れて帰らにやな
らねえ。

へ駆け出す襟首とつて引き留め

ト、時致内へ入らんとするを、少将止めて

少 将 時致さま、そりゃあんまり野暮というものでござんす。
惚れた女子と酒酌み交わすが、そんなに悪いことかいな
あ。

時 致 イイヤ常なら酒呑もうが、抱いて寝ようが構わねえ。
が、大事の迫る身の上で女子遊びの気が知れねえのだ。

少 将 大事の迫るというからは、さては首尾よう祐経を。

時 致 コレ。(ト、合方になり) 明日より始まる富士の巻狩
り。総奉行たる工藤祐経、陣屋の内でぐつすり眠るを
合図に忍び込み、親の仇と討ち取る覚悟。明くる朝には
出立と言うたは誰あろう兄者人。それが女子と離れ座敷

は、こりゃおかしくはあんめえか。

少 将 なるほど、もつともでござんす。そんならわしもお虎
さんの席に出るほどに、次の座敷でござんす。

へ傾き睨む門の内、まこと色香に迷いなば不埒な兄の
鯉口を切らんと

ト、時致、暖簾口を睨み、刀の柄に手をかける。

少 将 これに気付き、

少 将 モシ。

ト、言うを柵の頭。時致刀より手を離し、兩人暖
簾口へ入る。二の柵にて、この道具替わる。

第二場 大磯廓離れ座敷の場

本舞台常足の二重。奥には床の間、違棚、襖などあ
り。床の間に三方あり。上手に松の木、枝落とす仕
掛け。すべて大磯廓離れ座敷の体。廓唄にて道具納
まる。祐成、虎御前の酌で酒を呑んで居る。

祐 成 イヤ今宵の酒は水のようにじゃな、呑めども呑めども酔
いが回らぬ。お虎、そもじも一献汲まぬか。

虎 なにを言わしゃんす、いくら大事な祐成さんのお言葉

でも、わしゃ酒はならぬほどに、勘弁してくださいませ。

祐成 ならぬいうても、この酒で酔うことはない。よき酒は水に似るとはよう言うたものじゃて。サ、この祐成に騙されて一杯呑んでみや。

虎 そう甘い口さかしやんして、どうする心でござんすえ。

祐成 ハテ滅相な。抱いて寝松の心なら、酔いつぶすには及ばぬ、及ばぬ。

虎 エエ、お憎らしい。

ト、虎、そつぽを向く。

祐成 すねた顔まで可愛やなあ。

へ、辺り構わぬ睦言は、二人の仲に恥じずして、ただ紅にのぼせるははたで聞く者ばかりなり。少将も声赤らめて

少将 お虎さん、少将が参りましたわいな。

へひらく襖の向うより覗く時致押しとどめ、必ず動いてくださんすなと目顔で知らせ居たりける

ト、奥の襖開き、少将、時致に目配せする体にて下座になおる。

虎 オオ少将さん、よいところに来てくださんした。祐成

さんが転合ばかり、わしに呑めぬ酒呑ませて寝ようと。

少将 なにからなにまで承知でござんす。

虎 そりゃまた、どうして。

少将 あの睦言のうるさいこと、外まで聞こえておりましたもの。おかげでわしも当てられて身の内が暑うて暑うて、臍月でのうて夏のよう。

へ暑や暑やとおおぎける

ト、少将、己と二人をおおぐ。

祐成 それほど暑いと言やるなら、一杯呑んで冷やすがよい。

少将 コリヤ祐成さま、はや酔うてでござんすかえ。

祐成 イヤ水のごとき美酒なれば、酔いはせぬ。虎と酌み交わさいでは、酔おうにも酔えぬじゃ。

虎 なんと言つても、わしゃ断るぞえ。

祐成 冷たやな冷たやな、睦言さます女子のぴつしやり、ハハハハ。

へと酔わぬ酔狂。少将は思案を極め

少将 モシ祐成さま、そなたはここでお虎さんと、一夜を明かす心かや。

祐成 おんでもないこと、ことによつては居続けじゃ。

少将 そんなら仇討ちは。

祐成 コリヤ、仇討ちとはなんのこと。あた打ち解けしお虎

の肌、わしゃもう武士ではないわいの。

へ虎にころりと寝てかかる、仔猫のごとき有様なり

ト、祐成、虎御前の膝に寝る。

へさしもの時致こらえかね、襖ガラリと蹴破れば

ト、時致、襖を蹴破り出でる。

祐成 オオ推参な弟、女子と遊ぶこの兄に邪魔立てするとは尾籠千万。廊におのれは札止めじゃ、とつとここを出て失しよう。

へ起きも上がらでののしれば

時致 チェエ見損のうたり、兄者人。十八年の春秋を忍んだ甲斐の富士の山、親の仇を目前にようまあ武士でないだのと、ぬけぬけと言いくさつたな。こうなるからは弟時致、父に代わつて折檻しよう。覚悟ひろげや、十郎祐成。

へ刀の柄に手をかくれば

祐成 なんじゃ、弟の身で兄を切るか。切らるるものなら、どこからなりと切つてみよ。おのれに剣を教えしはこの兄じゃぞ、祐成じゃぞ。

時致 ウヌ、その舌の根を。

へ兄弟仲を争いて、あなたは刀こなたは白扇

ト、時致刀を抜き、祐成は白扇にてちよつと立廻

り、時致二重より跳び降りて兩人キツと見得。床のメリヤスにて祐成、あしらい気味に時致と立廻る。

へ右よ左と受け流され、兄の手並に敵わじと尻居にどうと倒れ込む

時致 ト、時致トド尻居に倒れる。祐成、縁に腰掛ける。南無三宝、かほど腑抜けし兄者人にむざむざ負けを喰らうたあ、亡き父上もさぞやお嘆き、曾我の家への不面目。武士の一分、死んで恥辱を。

へ刀逆手に取り直せば

祐成 ハテサテ阿呆な弟、今おのれが腹切つたれば、亡き父上への申し訳が立つか。

時致 なんと。

祐成 親の仇を討つ役は、この兄一人に任すと言うのか。惨めなやつめ、これでもかぶつて頭を冷やせ。

へこれまで呑みし徳利を、何思いきん取り上げて、時致の頭にぶちまけば、不思議や酒の香りなく、澄みて冷たき清水なり

ト、祐成、徳利を持って件の酒を時致にかける。

時致、水を拭つてこれは清水だという思い入れ。

時致 水を喰らうてこのしだらたあ、兄者人、どういうわけ
で。

祐成 オオそのわけ語らん、虎少将にも聞いてくりやれ。

(ト、二重に上がる。胡弓の入りしメリになり) 安元二年神無月、父祐泰を祐経が赤沢山に討ちしより、時も廻りて十八年。

へ養父祐信を頼みとなし、曾我十郎祐成とて元服はしたれども、心は変わらぬ河津の嫡子

祐成 おのれ仇の工藤祐経、今日や討たん、明日や討たん
凝り固まつたる父上への志。思いに思いし年月に、神明
三宝を拝んだる靈験にや、この皐月下旬。

へ鎌倉殿の御心にて、富士の裾野の巻狩りに一藤職は
彼が役。夜陰に乗じて陣屋へ乗り込み、首かき切ら
ん

虎 エエ。

祐成 コレ。

へこれぞ好機と時致に言い合わせ、明日出立する上は
二度と生きては帰らぬ所存

祐成 覚悟はとうより極めしが、ただ気にかかるは虎が身の上。
ひよっと連座もあるものかと、旅立つ前にここへ来

てすすめし酒の岩清水は、

へ弓矢八幡御照覧の、起請に劣らぬ三行半

祐成 ありや、永の別れの水盃じゃわい。

虎 エエエエ。そんならなにを言わしゃんす、最前から
酔うたふりをして、わしにくださるお盃は、めでたいめ
でたい敵討の門出別れのお盃。

祐成 左様じゃほどに、サ吞んでくりやれ。

虎 嫌じゃ嫌じゃ、わしゃ吞みませぬぞえ。

祐成 鎌倉殿の御足下騒がす大罪人、縁を切らずがわしの情
け。その道理がわからぬか。

虎 わかるうにもわかりやせぬわいなあ。

祐成 聞かぬとあらば是非がない、この場でそもじを切つて
捨てうか。

虎 サアそれは。

祐成 盃受くるか。

虎 サアそれは。

祐成 切り殺さんや。

虎 サア。

祐成 サア。

両人 サアサアサア。

祐成 コリヤお虎、聞き分けてたものう。

ト、この内、互いにせり合うことあつて、虎御前
思入れ。水盃を取つて呑み、酒の銚子を手に取
る。

虎 エ工聞こえませぬ祐成さま、我がつまさま。連座に遭
うて殺さるるを不憫に思つて水盃、その清水こそわしに
は毒。毒を喰らうたこの上は、再び出逢う二世の縁。

へ妹背固めの盃を、差し交わさば女夫の仲。曾我十郎

祐成が

虎 北の方じゃと連れ添うて、生くるも、

へ死ぬも苦界でも、ぬしと一緒が幸せと、

虎 ひとこと言うてくださすりゃ、わしやよろこんで死
にますわいなあ。

へ別れと固めの逆さま事、二世の契りを差し付くる

ト、虎御前、盃に酒を注ぎ、祐成に差し出し、思

入れ。

へ祐成うむとうち領き

祐成 そんなら女夫になつた上、水盃の生き別れ。この祐成
に連なりて、鎌倉へ引き据えられてもか。

虎 夫と別れてみすみすと生きる心はわしや持たぬ。親の

仇を討ち果たせし大丈夫、曾我十郎祐成が妻じゃとしゃ
んと名乗つてナ、頼朝さんのお怒り受け、首と胴とが離
れても。

へ未来はひとつ蓮じゃと嬉しげなるは判官を慕いて謡

う舞姫もかくと見紛う女子なり

祐成 それほどに言やるからは、わしもそもじと女夫の約束。
へ盃取つて一口に、涙もろとも呑み干せば

ト、祐成、盃を虎御前より受け取り呑む。

少将 サアおめでたの女夫の契り、これからは盃事じゃ。わ
しが仲立ちしようから、時致さまも手伝うてくださんせ
いなあ。

ト、艶やかなる唄になり、少将、祐成と虎御前を
正座になおす。時致、床の間より三方を取り、二
人の前に据える。少将の酌で、三々九度の盃をお
さめる。

少将 お虎さん、これでおまえは祐成さまの北の方、時致さ
まは弟御じゃ。武士の女房とあるからは、送り出さねば
ならぬぞえ。

虎 なんじゃいなア、夫の大事に水盃、取り交わした仲
じゃもの。まさかのことがあろうとも、なんの泣こうぞ、

うれしかろ。

祐成 ウムさすがは祐成の妻じゃ、よくぞ言うたり。親の仇を討つ後にわしに何か事あらば、後世の弔い頼むぞよ。
この祐成も今はや思い残すこともなし、富士野をさして出立せん。コリヤ時致、支度いたせ。

へ行かんとするを、妻は引き留め

虎 アア申し、ちよつと待ってやってくださいませ。

祐成 待てとはなにを。

虎 サイナア、わしが固めをしたというに、少将さんをこのままに時致さんとお名残は、あんまり意地が悪いゆえ、それでおとどめするわいな。

へ言葉に祐成、はつとなし

祐成 いかさま、兄の祝言見ておいてなにもなしに帰らんとは、弟もさぞ苦しかろう。されば此度は兄夫婦が仲立ち、嫁御寮にはこれなる席へ。

虎 花婿殿も上がってきやんせ。

少将 イエイエそんな、

二人 わたくしは。

祐成 ハテマア正座へなおれというに。

へ否応もなく好いた同士、兄御夫婦の盃に

ト、静かなる唄になり、時致と少将、正座にすまい、三々九度の盃をおさめる。祐成、虎御前、介添をす。少将、袖で顔を隠す。

虎 これでよい女夫になったわいな。

祐成 いくら嬉しいとは申せ、花嫁御寮が顔隠しては婿が難儀な。コリヤ時致、その袖払うてやれ。

時致 ハア。

へ手をひかえれば袖濡るる、笑みも泣き顔見てびつく

り

時致 ヤア何故泣く、女房ども。

少将 サ、その女房になったが涙の種。嬉しさ余って今宵には永き別れと思うにつけ、水盃のおそろしさ。これが泣かずにいらりようかいなあ。

へ嘆きに虎も祐成も、道理とばかり領けば

時致 もっともなる泣き言じゃが、明日の出立は動かされぬ十八年来追ひ求めし親の仇の工藤祐経、討つ取るは今この時。覚悟の臍の極め付き、泣かずに送れ、コリヤ女房。

少将 アイ。

へアイと答えて少将は、今に別るる悲清水、こらえて注ぐを吞み干して、我が手に酌し時致へ渡せば

ト、少将、虎の酌にて水盃を呑み、自ら注いで時致に渡す。

時致 とはいえやはり、この盃は。

少将 エエ、女だてらの三々九度、口を切らせて逃げますかえ。

時致 チエエ、俺の分まで泣きおれやい。

へ万夫不当の時致が、この世の別れたまり得ず、一期の涙もろともに清水を胃の腑におさめけり

ト、時致、思い入れあつて盃を干す。

へ折より聞こゆる法螺陣鉦

ト、どんちゃんになり、法螺貝の音響く。

祐成 ヤア、あれに聞こゆる戦の物音。鎌倉殿に大名の卷狩りの列に極まつたり。

時致 こううかうかはしておられぬ、兄者人、このまますぐに。

祐成 合点じゃ。

へ血気にはやる夫の取る刀のこじり引き留むる、そればかりにて物言わぬ心は泣くよりいじらしや、兄弟顔を見合せて刀ぼつ込み出で行くを、虎がはなむけ松が枝を

ト、兄弟刀を取つて身支度するを、虎少将引き留め、皆思い入れ。虎、上手の松の枝を手折つて祐成に渡す。

虎 めでとう父御の仇討つて。

へ見送り帰りを松原と、言われぬ武士の妻心。少将は盃取つて押し頂き、

少将 こちの人とわしとで呑んだこの盃、何があるうと、

へ碎けぬというまじないに、その身の武運を祈り込め

ト、少将、盃を時致に渡す。

祐成 女房の志、必ず忘れぬ、

兄弟 忝い。

へ御本望をと送る妻、背に残して出で立つる、兄と弟の勇ましし。

ト、時致先に花道へかかるを、祐成入れ替わつて兩人キツと見得あつて向うへ入る。

へかかるところへ仁田忠常

ト、仁田四郎忠常、ぶつ割き羽織に野袴、大小にて奥の襖より出で来たり、

仁田 ヤア聞いた聞いた。このわしを押しつけ、お虎と睦言交わせし若造。ありや曾我の倅、祐成にてありしよな。

邪魔なる工藤祐経を殺せし咎を言い立て、鎌倉へ弓引く

悪人を討つ取らば、鎌倉殿のおぼえもさぞやめでたからん。恋の仇の十郎祐成、この忠常が討つ取りくれん。

へと駆け出せば、虎は押し止め

ト、仁田、行かんとする。虎、止める。

虎 コレ、四郎殿。いかなる因縁あればとて、人の夫を殺

しゃると許しやせぬぞえ。

仁田 ナニ夫、あの小僧がお虎の夫なれば、ますます討たね

ばあいすまぬ。ひとたび帰つて支度整え、刀の錆にいたしてくれるわ。

へヤレそこ退けと突き飛ばし、館をさして駆けり行く

ト、仁田、虎を突き飛ばして向うへ入る。少将、

介抱す。

少将 あのご兄弟さまなれば大事ないとは思えども、テモ案

じられた、(ト、柵の頭)ことじゃなあ。

ト、唄になり、少将、虎を抱き起こす。この様子

にて

キザミ幕

二幕目第一場 富士野松ヶ瀬の場

本舞台一面に黒幕、細き月の作り物を吊るす。後ろに松林、足元に芝を茂らせ、全て富士野松ヶ瀬の松原の景。風音にて幕開く。竹本になる。

へ時しも皐月の二十八日、富士野の陣屋は総奉行工藤祐経討たれしとただ騒然たる松原に逃れ来たりし若侍

ト、向うより軍兵大勢出で、後より曾我十郎祐成、狩衣の袖をたくし、侍烏帽子、草鞋履きにて、刀を抜いて出で来たり、キツと見得。そのまま本舞台へ来たり、誂えの合方にて軍兵と立廻り充分にあつて、トド向うへ追い込み極まる。辺りを窺い、討手の居ぬを見る。

祐成 時致はいずれにおる、時致、時致。兄はこれにあるぞ、時致、

ト、この時軍兵一人、祐成にかかる。これを返すことあつて、

祐成 やアい。こりやおらぬのか、オオイ、時致、弟、

ト、別の軍兵一人絡むことあつて、

祐成 やアい。

へ呼べど叫べどいらえなく、そのままそこにどうと座す

ト、祐成、本舞台にて座り込む。合方となり、

祐成 むざんやな我が姿、首尾よう陣屋に乗り込みて、親の仇の祐経を討ち取りしは功名なれど、暗きに紛れ時致にはぐれしうえ、もはや力も残らぬは、これがどうして武士であろうや。二世を契りしお虎にも、さぞ恥ずかしく思おうなあ。

へ涙たたえてかこちける。折しも敵を松陰の、刃一閃きらめけば

ト、祐成、泣く心にて思い入れ。背後の松林より刀を先に出し、御所五郎丸、袴着付の拵えにて出る。

祐成 ヤア、松林に潜みおるは、何奴なるぞ。

御所 これは鎌倉殿の近習にて御所五郎丸と申す者。汝が弟時致は、身共が腕で生け捕ったり。

祐成 スリヤ時致には、生け捕られしか。

御所 もはや逃れぬ十郎祐成、イザ尋常に勝負いたせ。

祐成 なにを。

へ互いに刀抜き合わせ抜き合わせ、エイヤと押せばオウと受け、引かぬ争い流石の勇者。不意をつかれし祐成が刀ぱたりと取り落とせば、五郎丸も太刀投げ捨て、いでや組まんと大力、ハテ面白しと組み討つを、ちつとも一步も動かさぬ

ト、兩人刀にて立廻り。祐成、刀落として組討となる。五郎丸の力強く、祐成かなわぬ体。

御所 降参なさば命は取らぬ、その腕早う離されよ。

祐成 エエこれしきの力など、この祐成の手にかからば。

へなんの敵わぬことあろうやと、組み討ち投げ打つ折からに、仁田四郎走り出で恋の仇、祐成やらぬと後ろ袈裟、ばつさり切れば祐成も痛さ余って倒れ伏す

ト、兩人組討で立廻るうち、下手より仁田四郎、具足にて現れ、祐成を後ろ袈裟に切り付ける。祐成、その場に倒れる。

御所 コリヤ仁田殿、何故お手に。

仁田 ハテ何故とは知れたこと、鎌倉殿へ弓引く曾我の兄弟討たずばかえて上への不忠、なんとそうではござらぬか。

御所 とはいえ卑怯な後ろ袈裟。

仁 田 卑怯とは何を言わるる。戦で後ろに目を配らずば、討たるるもまた道理。

祐 成 チエエ無念、口惜しや。かくなる上はさらに命は惜しまねど、惜しまるるは妻のお虎が事、一目なりとも逢いたやと言うて死んだと大磯の廓へ伝えてくださりませ、コレ御所殿、拝みまする。

へ手を合わすれば五郎丸、恋路ゆかしの若武者に武門の涙もよおせり。仁田は刀取り直し

仁 田 エエだらだと女の愚痴、それがおのれの悪きところだ。つべこべ言わずと往生ひろげ。

御 所 アイヤ暫く。祐成殿の御介錯、この五郎丸めにお任せくだされ。

仁 田 そりやまた手柄を横取りめさるか。

御 所 左様にてはござりませぬ。手柄は初太刀の仁田殿へ、身共が役は後始末。イヤナニ祐成殿、あとの名残は諸事万事この五郎丸が請け負うたれば、未練残さず成仏解脱。

祐 成 ナニ、請け負うてくださるとか。

御 所 いかにも。

祐 成 エエ有難や、忝や。この上は御所殿、早く苦痛を、ご苦労ながら。

へ西に向かいて手を合わせ、首をのべたるその有様、天晴武士の鏡なり

ト、祐成、虎御前へ思い入れあつて、手を合わせるを柀の頭。五郎丸、刀を構えるを二の柀にて、黒幕を振り被せる。

第二場 大磯廓離れ座敷の場

本舞台、元の通りの大磯廓離れ座敷の体。この道具、後に屋体崩しとなる。薄ドロを打ち上げ、柀につき黒幕を振り落とす。虎御前、うたた寝より冷めし体。さては今は夢かいなあ。祐成さんが立たれてより不思議の夢もいろいろ見たれど、首を切らるる夢などは、わしゃ願ひ下げじゃわいなあ。

へ怖や怖やと鶴亀を、口に唱うる折からに、少将奥より駆け来たり

ト、少将、奥の襖より出で、

少 将 お虎さん、ここにござんしたか。おまえとわしにお客じゃとて、お侍がお二人来てじゃぞえ。

虎 なんじゃいなあ、お侍はお侍でも、わしゃ祐成さんの

他は逢いとうござんせぬ。

少将 サイナア、祐成さまじゃけれども、ご同役の鎌倉武士。ひとりはいつもの仁田の四郎、今おひとりは御所五郎丸さまというて、富士野より戻ったその足でわしらに話があるとのこと。

虎 四郎殿は顔見るも嫌じゃが、御所さまとやらのお話は何かいなあ。

少将 おおかたわしらの背の君の武勇の話とみたわいな。

虎 アノ、そんならひよつと祐成さんが、仇討ち見事におおせて。

少将 通してもようござんすかえ。

虎 お二人ともに通しゃいのう。

へ浮かれて虎に翼なる、天に昇らん心にて

少将 お待さま、お通りくださりましょう。

へ呼ばれてひらく襖の内、仁田四郎はどすどすと鬼もかくやの威丈高。あとに控えし五郎丸、静か静かに悠々と頭を下げて入りけるは、同じ鎌倉武士ながら貴賤ははきと知られけり

ト、奥の襖より仁田忠常、赤ビロードの袴、黒の着付にて出る。その後より御所五郎丸、織物の袴、

白の着付にて出で来たり、上座になおる。

へ虎少将は手をつかえ

虎 遠路お疲れと存じまする、酒ひとつお上がりなされませ。

仁田 コレサコレサお虎殿、わしらの話聞く時は、酒など呑んではいられぬじゃて。

少将 そりやまたなぜでござりまする。

御所 身共らが参りしは、曾我兄弟の殿ばらよりの頼み事を受けてのこと。

虎 その頼みとは、お手柄かえ。

仁田 なんの手柄で、

御所 サ、手柄もあれば驚くべき話もあれば気を静め、身共の語りをお聞きくだされ。

へ物語らんと座を構え

ト、五郎丸進み出で、

御所 さても去んぬる臯月下旬、二十八日の宵の刻。続く富士野の巻狩りに鎌倉武士も疲れの顔色、とりわけ工藤祐経殿は、総奉行の務めはなはだ重く陣屋の寝所に休み居るを、怪しき兄弟忍び入り、

へ門をくぐりて寝所なる、祐経殿の枕辺にうち近づき

て名乗りを上げ、我々は河津三郎祐泰が忘れ形見の兄弟にて、兄の一万長じて曾我十郎祐成、弟箱王は五郎時致、父の仇なる工藤祐経、恨みの刃思いしれとただひと討ちに討ちとむれば

御所 辺りの者も起き出だし、こは危うしと浜辺なる松原さして遠近と、彷徨ううちにはぐれしは

へ天運尽きたるしるしにや、第五郎時致は落ちる道筋身共に出くわし、鎌倉に名を馳せし力を以て組みふされ、幕下の陣へ引き出され

御所 祐経が倅の愁訴にて、首打たれしは無念至極。

少将 エエ、そんなら時致さまは。

御所 コリヤ騒がれな、まだ片割れが残つておる。その頃兄の祐成は、

へ弟探して松原を彷徨い歩く折からに、これも身共に見出され、むんずと組み合い戦ううち、不意に切つたる後ろ袈裟

仁田 それ切つたるはこの四郎、あわれ十郎祐成も、深手を負うて立つこと能わず。

御所 コレ。流石は天下の大丈夫にて、命は惜しうあらねどもたつたひとつ気がかりは妻のお虎がことばかりと、

へ死を松原にこの御所へ、拝む頼むと手を合わせ、西を向いてぞ散つたるは

御所 武門の鏡と言わん。その背の君が奥方へ、一目なりとも逢いたやと死にましたぞと伝えくれと、それゆえ今日のかくの仕儀。

虎 へ語りしまいて座を正す。すわ正夢かと虎はおどろき左様なれば祐成さまは、武士の鏡とうたわれて、わしに逢いたい気を揉んで、首を打たれてござんすかえ。

御所 いかにも左様。

仁田 コレ、お虎。かくなる上はわしが亭主となろうほどに、祐成のことは思いきつたがよからうがな。

へつかむ袂を引き離し

虎 エエ、阿呆なこと言わんすな、阿呆なこと言わんすな。愁傷顔の物語、もうわしゃたくさんじゃわいなあ。たとえ褒めてもくさしても、親の仇を討ち取った立派な殿方、わしの夫じゃ。それを咎かけ追い込んで、首取つたのが武士の手柄でござんすか、それが手柄になるかいなあ。

へ覚悟の水の盃も、末期になろうと心はすれど、こうして死なれてみるときは、心も胸も潰れ果て

虎 こんな憂き目に遭おうなら、祐成さんは侍に、どうし

て生まれしやんしたか。わしや侍が憎うござんす。

へ武士の習いというたとて、情け涙にくれにける。少将も目をこすり

少将 お虎さん、そりやわしとても同じこと。時致さまのことじゃもの、將軍さまの前にいて片意地はつて死んだであらう。俺の分まで泣きおれと言いやるゆえにわしの目に、

へ涙の水の止まらぬは、形見に渡せし盃に思い溢るる

ゆえかいの

少将 侍などはけだもの同然、もうこの上は我がつまの菩提弔う尼法師。

へ黒髪取つて切らんとすれば

仁田 コリヤコリヤコリヤなにを馬鹿な。死んだ男に操を立てその黒髪を剃らんより、この世にあつてこのわしと女夫になるがよい思案じゃ。どうで曾我の犬侍、わしにはちつとも及ばぬわえ。

へ骸に唾するその勢い。虎御前は辛抱たまらず、仁田の刀すらりと抜き肩より袈裟に切りつくれば

ト、虎御前、仁田に切りかかる。仁田、よろよろとなり肌ぬぎになる。

仁田 ヤアわしに手傷を負わせるとは、ますます以小癩な

女め。絡めとつて手籠めになさん、ソレ。

軍兵 ハアーツ。

ト、三つ太鼓になり、軍兵大勢出で来たり、

軍兵 動くな。

ト、虎御前、少将、ちよつと立廻つて極まる。

へ元より剣術白刃の傾城、よけてかわして危うきところへ

へ一天にわかにかき曇り雷も轟き降る雨に、虎は夫恋

う涙雨

ト、立廻るうち、暗くなり雨音、雷になる。軍兵

止まる。

虎 ヤア、この雨こそは祐成さんが、わしを救わん涙なるか。嬉しさ余つて虎に翼、剣術なり妖術なりわしに授けてくださんせ。頼みまする、こちらの人。

へ拝めばたちまち祐成が、お虎の方に取り憑いて仁田四郎をぼんぼんぼん、足をとどめし虎が石、あわれ無惨の最期なり

ト、虎御前、仁田を踏み殺す。

御所 いかに恨みのあらばとて、鎌倉武士を討つた女。た

虎

だこのままには捨て置かれぬ。

へ飛び降り刀抜き放てば

ナニ、曾我十郎祐成が北の方たるこの虎を、犬侍が討たんとか。夫の魂備わりてたちまち覚えし怪しの術、冥土の土産に受けてみよ。

へ少将もろとも妖のいずくともなく消え失すれば

ト、虎御前、少将、煙の中へ消える。

へ虎少将にその夫の二つの女夫が池の面、蓮で逢いし涙のしとど、虎が雨とは名づくらん

ト、五郎丸、このうち悪鬼をはらう立廻り。軍兵も槍にて立廻りあつて、竹本の切れにてこの道具、トド屋体崩しになる。

本舞台一面、座敷の屋根。その上に大きな作り物の虎を据え、虎御前それに乗り、松の枝を持ち居る。少将、虎の首にかけたる綱の先を持って立居る。五郎丸、平舞台に立居る。

へ怪し、恐ろし

ト、虎御前、松の枝を振るうを柝の頭。明るくなり、引っ張りの見得にて

拍子幕

米^{まい}

原^{ばら}

信^{しん}

東京都在住

佳
作

新平家公達草子
にせのえにし
男女縁西
海
扇

二幕二場

安樂井

薫

男女縁西海扇

あらずじとねらい

第一幕

寿永三年二月、平家の一門越前三位通盛卿は、摂津国一の谷に陣をまかされ、三草山の合戦に勝利し、勢いに乗る源義経軍を迎え撃とうとしている。

しかし、通盛の傍らには、源氏に与する所の獵師熊王丸が妹・若菜を問者にして、通盛を籠絡、陣中の様子を探るよう命じる。若菜は、兄の命に従い、矢文で連絡を取り合う。兄からの矢文が届いたところを、通盛の乳母子・滝口時員に見咎められ、嫌疑がかかる。そこへ、酔態の通盛が現れ、事の仔細を問ひ質す。しかし、通盛は若菜の口車に乗せられて、時員の言葉信じない。見かねた時員が通盛に諫言すると、怒りだす。その様子を、陣中近くの藪の中から熊王丸がうかがう。

宵になり、新中納言平知盛の固める須磨の陣から、二位尼の使者として、通盛の妻・小宰相が一の谷の陣へやって来る。時員の取次ぎで通盛と会うが、通盛は戦出立に臨んで、一の谷には来るなど言っただけで小宰相を叱る。小宰相は、須磨の陣中

に、帝とともにおわす二位尼の使者としてやってきたことを告げ、また、夫の身が案じられたと漏らす。これを聞き、通盛は激怒、未練な女を妻に持つのは通盛一生の不覚と言ひ、その場で離縁を伝え、若菜を女房にすると言う。これを聞き、小宰相は、通盛の子を身籠ったと伝えるが、夫の言葉を翻そうとする戯れ言と一蹴。ゆかりの檜扇を持って立ち去れと言う。しかし、これらはみな、源氏の問者・若菜の裏をかく通盛一人の計略、心と言葉は裏腹だった。小宰相は、思い昂ぶり、檜扇をなかば引き裂いて陣屋を後にする。

夜が更けて、若菜を訪ねて熊王丸がやって来る。落ち合う兄妹。兄は、よくやったと妹を誉め、まもなく義経軍の攻撃が始まるから陣屋を立ち退けと言うが、若菜は厭だと言う。通盛の妻になると言つて、熊王丸と諍いになる。そこに通盛が現れる。通盛は熊王丸の素姓を質し、若菜が兄を家来にしてほしいと言う。驚く熊王丸。通盛はそれを許し、この辺りの獵師だと言う熊王丸に鴨越のことを尋ねる。しかし、なかなか様子を語らない。兄の態度を見て、若菜は鴨越の獣道を、通盛に伝え、通盛は義経の計略を推し測り、装束を褒美に兄妹を陣屋から追い立てる。

装束を脱いだ通盛は、甲冑姿。熊王丸は謀られたと思い、妹

を連れて逃げようとする。そこへ小宰相が義経軍攻撃開始を知らせに戻って来る。小宰相に斬りかかる熊王丸の刃を、身を挺してかばったのは若菜だった。若菜は、苦しい息のもと、通盛の心を感じ入り、兄を裏切ったと。また、間者として通盛を騙した罪の報い、通盛の子を宿す小宰相をかばい、命を捨てたことで自分の思いを伝える。通盛と小宰相は、若菜に対し、心から礼を言う。それを聞いて若菜は絶命する。

通盛は、時員に小宰相を託し、一の谷から須磨へ落とす。入れ違いにやって来た源氏の兵士と熊王丸、実は鷲尾三郎義久との激しい戦闘の中、通盛は一の谷の陣において討死する。

第二幕

平家軍は須磨の陣を追われ、淡路の瀬戸に御座船で逃れる。小宰相も帝を守り、船の上から、源氏の軍兵を迎え撃つ。そこへ、時員が加勢に漕ぎ寄せ、軍兵を討ち果たす。

小宰相は、時員を御座船に招き、通盛の様子を尋ねる。時員が、通盛の最期を伝えると小宰相は号泣する。それを聞いて、二位尼、安德帝、大納言乳母、治部卿局が姿をあらわす。時員は、二位尼の言葉に、通盛の最期を語りはじめる。おわると、再び戦に行くと言う時員に、二位尼が錢の盃をとらせると、屋

形の中に招く。時員は通盛の形見の扇を小宰相に渡し、屋形の中へ。

一人になった小宰相は、形見の檜扇を見て、入道相国清盛公の故事にあやかり、扇で夫の魂を招くと、通盛の霊が現れる。通盛の霊は、小宰相と別れを惜しみ、再び海に消える。小宰相は、夫の魂を慕って、入水に及ぼうとするが、二位尼が止める。そして、通盛卿の子を産んで、そのち夫の菩提を弔うように説得。小宰相を御座船から下ろし、時員の案内で比叡山横川に赴かせるのだった。

戦乱によって運命を翻弄される人々の、互いに互いを思い合う心、また、ゆえあつてすれ違う心が生む悲劇、命の尊さを作品に込めました。

【参考文献】

名作歌舞伎全集 第二・四・五巻 東京創元新社

新潮日本古典集成 謡曲集下 新潮社

新日本古典文学全集 平家物語2 小学館

第一幕 一の谷越前三位平通盛陣屋の場

役名

越前三位平通盛

通盛妻・小宰相

獵師・熊王丸 実ハ鷲尾三郎義久

侍女・若菜

通盛乳母子・滝口時員

平家方の郎党三人

源氏の侍十人

本舞台、高足の二重、本庇本縁つき、白洲梯子。軒に、赤地に揚羽蝶の紋ちらしの幕を張る。正面、銀地の襖に揚羽蝶の紋。上手、一間塗骨の障子屋体。その前に桜の立木。そこここに、矢の立つ仕掛けあり。上手に柵矢来。下手に藪畳。いつもの所に陣門。すべて一の谷平通盛陣屋の体。ここに郎党三人いて、幕開く。

郎党一 この度の三草山の合戦では、九郎判官義経、夜討をか

けたというではないか。

郎党二 夜討も夜討。戌の刻より、近隣在所に火をかけたる大松明、三里も離れた平家の陣へ、瞬く間に攻め寄せたとか。

郎党三 なんでもその時陣屋の内は、戦は定めて明日のことと、皆々高枕の夢心地。

郎党一 そこへ源氏の軍勢一万騎が押し寄せ、御一門は散り散りばらばら。

郎党二 この一の谷へも、源氏の軍勢時を移さずなだれ込もうという風の噂。

郎党三 ううつと、首のあたりが俄かに寒くなってきた。

郎党一 臆病風に吹かれたな。

郎党二 したが、勢い勝る源氏とはいえ、一の谷のこの陣は、めったなことでは攻められまい。

郎党三 なるほど、後ろに鶴越をひかえる限り、判官とて容易くは攻められぬ。

郎党一 いやいや、相手は名うての戦上手。

郎党二 この陣屋とて油断はならぬ。

郎党三 しかば警護怠りなく。

鬨三三 そうだ、そうだ。

ト、郎党三人、下手に入る。

へ津の国の一ノ谷は、南は渚、北は山。名にし負う鶴越をそびらにして、守るにやすく攻め難き。かかる陣屋をまかさるる平家の公達、越前の三位通盛卿。木の芽も春の如月に咲き匂いたつ風情の武者。心急かるる桜木も、時世の風に堪えかねて咲くより先に散る花は人のさだめを思わする。

ト、このうち、上手の桜の立木に射込んだる矢文突き立つ。

へ氣配に一間を抜け出でし侍女若菜が忍び足、氣配り目配り縁に寄り、花散る桜それと見て。

ト、侍女・若菜、好みの拵え、上手障子屋体より忍ぶ体にて出、上手の桜の立木に矢文を見て思い入れ、梯子を下り、矢を抜きとる。このうち、上手より滝口時員、上下衣装、大小にて出、若菜に目を留める。若菜、矢を隠し持ち、梯子を上りかける。

時員 これは若菜殿、お待ち召され。

ト、若菜、ふり返り、矢文を隠すこなしあつて、若菜 ホホ。

時員 フフ。

若菜 ホホ。

時員 フフ。

両人 ハハハハハ。

へ愛想笑いに紛らわし。

若菜 これはこれは、誰かと思えば時員殿。御警護御苦勞に存じます。

時員 九郎判官、三草山の勝利に乘じ、越前の三位通盛様がお守りなさるこの一の谷へ押し寄せんも間近と聞けば。

若菜 ナニ、その御心配には及びますまい。陣屋の北には人馬も通わぬ鶴越の断崖絶壁、襖屏風の如く聳え立ち、いかに源氏の兵でもどうにも手出しできませんまい。

時員 とはいえ判官は名うての戦上手。三草山も大松明の奇策によつて、我が一門は出し抜かれしぞ。かかる絶壁のあるからとて、油断のならぬ九郎義経。

若菜 それも杞憂の取越し苦労。たとえこの坂落としを軍勢下り来るとても、この陣屋のあちらこちら、用意の撒き菱、落とし穴。

時員 女子ながらに陣屋の仕掛、かくまでも御承知とは、へ侍鋭き目を侍女に向け。

抜け目のない御奉公。

若菜 コリヤ私としたことが。こんな所でうっかりお喋り。

へと行きかかるを。

ト、このうち、若菜、矢から文を抜き、隠すこなしある。

時員 アア待たれよ若菜殿。チト尋ねたきことがある。これに、これに。

若菜 ソリヤどのようなお尋ね。

時員 今、この桜より抜き取りし矢文の趣、それを答えてもらいたい。

若菜 矢文など、わしゃ知らぬわいな。

時員 お惚けめさるな。今後ろに隠し持つ矢文のことだ。

若菜 ナニ矢、矢とはこれでござりまするか。

へぼんと投げる憎々しさ。時員きつと手に取れば、まだ文も見ぬ矢の有様、さてはと侍、侍女に詰め寄り。

時員 最前抜き取る矢先の許、確かに目にした結び文。サ、いずれへやった、どこへ隠した。

若菜 知らぬわいな。

へと捨て置く言葉、立ち退く若菜遣るまいと、襟髪つかむそのところへ。

ト、梯子を上り、若菜に詰め寄り、兩人争うこなしあつて、時員、若菜を取り押さえる。この時、奥より越前三位平通盛の声あつて、

通盛 何をざわざわ騒がしい。コリヤ若菜、若菜はいずれにある。いずれにある。

へ呼び立つ声は越前の三位通盛卿、陣屋の内とも思われぬ、須磨の浜辺の千鳥足。

ト、正面の襖開いて、越前三位平通盛、烏帽子に直衣姿、爛鍋、盃を手に、酔うた体にて出、三人よろしくこなしある。時員、通盛の手から爛鍋を取って下手に、若菜は上手に、通盛、中央にて、三人よろしくきまる。

通盛 おったわ、おったわ。若菜、そもじは斯様なところで何していやった。

若菜 アイ。

へ応えるそばより時員は。

時員 畏れながら旦那様。

通盛 なに、旦那様じゃ。オオ、そちや時員。そなたもこれにか。

時員 はい。

通盛 斯様な所で、若菜、時員、二人して何をしていやった。

へすかさず応える作り言。

若菜 わたしや、時員殿に打ち叩かれておりました。

時員 何を。

通盛 ナニ、時員が打った、叩いたか。コリヤ時員、若菜を叩きし訳を言え。サ、下にいて。訳を言え。そちはなにゆえ女子をば、打ち打擲いたしたのじゃ。

へ居ずまいだし、侍は。

時員 畏れながらこの女子が、怪しき矢文を抜き取って、結びし文をいずこかへ隠せしを見咎めて、詮議をいたす今の仔細。ゆめゆめみだりなことではござりませぬ。

通盛 ナニ、みだりなこと。油断も隙もない男じゃ。そうして若菜、今時員が申せし文、そちや隠し持つのか。

若菜 わたしや文など知りませぬわいな。文じゃの何のと言いかけて、覚えなき罪の濡れ衣を私に着せる謀り事。

オオ聞こえた。時員殿、御前どこぞのお女中さんと、文のやりとり、いたすのであらう。したがそのお女中はまさか源氏で。

へ時員きつと声荒らげ。

時員 コレ女、言うに言変え根も葉もない。そのままには捨

て置かぬぞ。

通盛 オオ恐ワ。オオ恐ワ。恐やの恐やの。斯様に恐い顔するは、オオそうじゃ。コリヤ時員、凶星じゃな。どこぞの女中と懸想文やりとりいたすのであらう。陣中にて左様なことをぬけぬけと、テモマア、隅に置かれぬ侍じゃなア。ウフフフフ。

へ御酒機嫌。時員、膝詰め、座を改め。

時員 こは情けなき御仰せ。今危急存亡の秋の我が一門。大事の時に居合わせて、旦那様、あなた様はナア。

ト、これより合方となり、

ここは陣中、賤しき女子をお側に侍らせ、酒酌み交わすなどとは、北の方小宰相様が御覧になればお歎き遊ばすはこれ必定。

通盛 ムム。

ト、このうちよき程に、熊王丸、毛衣の着付、山刀を背負い、下手敷置より出、陣門に忍び寄り、様子をうかがう。

時員 かかる戦の習いとはいえ、恐れ多くも鳥羽の法皇様の姫宮上西門院様の御仲立にて御縁を結び小宰相様は、御大将新中納言知盛様の御陣中にて、日ごと夜ごとに帝

の御警護。忠勤にお励みあそばす折柄。

通盛 黙れ。

時員 それにひきかえ旦那様は、かかる女をお傍に侍らせ、
ここ一の谷へ御遊興まがいの体たらく。幼き頃よりお側に
仕えし時員にはお情のうて。

通盛 黙れ、黙れ、黙りおれ。若輩者の分も弁えず便々とし
た諫言立て。あまつさえ、門院様の、小宰相のと、場所
柄も構わぬ色恋話。斯様なこと、通盛疾うに忘れたわ。

酔いが醒めた。若菜、酒じゃ、酒をもて。

若菜 畏まりました。

ト、上手障子へ行き、時員をふりかえり、思い入
れあつて、入る。通盛、身を横たえ、肘枕、檜扇
で顔を隠し眠る体。時員、梯子を下り、門の方へ
歩み寄り、通盛を見上げて思い入れ。須磨寺の鐘
の音。上手屋体より、郎党一二・三、灯台を持っ
て出、よき所に置き、上手屋体に入る。時員、萎
れた体にて上手へ行きかかる

へすれ違ふ心も空の夕景色。峰吹きおろす一陣の春の
嵐に冴えかえる陣屋の門へ慕い来る、陣笠まぶかき
小宰相。

ト、向こうより、通盛妻・小宰相、陣笠、陣羽織、
大小の袴えにて出る。熊王丸、小宰相に気づき、

小宰相 下手敷畳に入る。小宰相、七三にてこなしあつて、
夜陰に紛れ、ここまでは来たれども、気にかかるは夫
通盛様のお身の上。この一の谷を仰せつけられ、お別れ
申せし折のお言葉。我いかにもなりぬとも、そなたは必
ず生きよと、仰せあそばす一言。案じられてならぬわい
な。

ト、思い入れあつて、陣門へ来る。

お取次ぎ。お取次ぎ。

ト、時員、陣門に向かう。若菜、上手屋体より、
燗鍋、盃を手に出る。時員、陣門を開け、

時員 あなたは北の御方様。

小宰相 時員殿か。

時員 お懐かしゅうござりまする。

へと迎え入れ。

ト、小宰相を迎え入れる。

若菜 時員殿。何事でございます。

時員 旦那様。旦那様。御方様が参られました。若菜殿、お
取次ぎ。お取次ぎ。

若菜 御方様とは解しかねます。最前あなたは北の方小宰相殿は、新中納言様の御陣中と申されたではござりませぬか。

時員 何にもせよ、御方様の御入来。取次ぎいたせ、若菜殿。へせつつく侍、侍女は煙たく。

若菜 旦那様。旦那様。

通盛 しばしの間、微睡みしか。若菜、酒の支度、調うたか。時員 旦那様。御方様が参られましたといなア。

へ言葉に一瞥、いぶかしみ、

通盛 ナニ、北の方が参ったと。

小宰 通盛様。お懐かしゅうござりまする。

通盛 そちや小宰相。そなた、ここへは何しに來た。

小宰 はい、御前を案じて。

通盛 ナニ。

小宰 アノ、いいえ。二位の尼君様から戦勝祈願の熨斗鮑、昆布、勝栗、これはすなわちその目録。御受納なされませとの仰せ、そのお使いに参りましてござりまする。

へとしおらしく、

ト、懷より目録を取り出し、時員に取り次がす。

時員、通盛の御前に据える。

へ通盛、さつと色を変え。

通盛 愚か者め。そちや、帝の守り役であろう。かかる大役を仰せつかりながら、御側を離れるとは何事ならん。あまつさえ、通盛が一の谷の陣を仰せつけられ、御大将新中納言様の陣中にて堅く言い置いたるわが思い、一の谷見舞うことは相成らん、来てはならぬと言ひ聞かす夫が言葉。そなたは心に留めぬか。

小宰 その御不興、お叱りはもつともながら、三草山の合戦に、我ら一門大痛手と承り、思い出さるるあの夜一言。一の谷はいかがした、通盛様は御息災か、様子が知りた

い、へ飛び立つ思ひは比翼の鳥、会いたさ見たさに天翔けるこの身に翼無けれども、暮るるを待ちかね。

ト、クドキよろしくあつて、

尼君様の御許しにて、ついここまで、

へ妻の言葉も聞きやらず。

通盛 ヤア、戦に臨んでは命なきもの。この通盛が討ち死にしたら小宰相、そなたは何とするのだ。

小宰 討ち死などと、滅相もなきこと。

通盛 未練の性根は武門の恥辱。かかる女を妻に持ったはこ

の通盛が一生の不覚。

へ怒りあらわの面相も、心に違う思いの丈、涙を呑んで言い放つ。

小宰相、そなたとの縁はこれまでじゃ。いずれへなりと疾く失せイ。

小宰 なんと仰せられます、通盛様。

通盛 コリヤ若菜。今からはわれが女房。

へ驚く若菜抱き寄せれば。

ト、若菜を抱き寄せる。

若菜 旦那様、スリヤ真で。

通盛 真も真、真実そのまま。

若菜 ソンナ私越前の三位通盛様の。

へ北の方かと頬を染め。

通盛 左様じゃ若菜。そちは嬉しいか。

若菜 アイ。

通盛 左様なれば善は急げ。義経の軍勢迎え撃つ、わが軍勝利の前祝いに若菜との祝言せん。オオちようどよい、引出の品。祝いの品もあるからは、時員、祝言の支度せイ。

へ下より見上げる北の方、涙にまなこかき曇り、哀れ萎るる気色なり、

時員 ソはあんまりな仰せ言。須磨の陣より一の谷へその御

苦勞もお厭いならず、御使者とはいえ、こう参られた御方様の御心のほど、旦那様、御推量なされて下さりませ。

へ言うもやらずに大音声、

通盛 またしてもまたしても。身をわきまえぬ出しゃばり言。

かくまで小宰相を思うなら、時員、そちがこの女を女房にいたせ。

時員 何を仰せられます。

通盛 別れの印じゃ、小宰相。サ、これ持つて早うこの場を、立ち退け、立ち退け。

へ懷中より取り出だす、肌身離れぬ檜扇の要を一期と握りしめ、ハッと投げつけ天うち仰ぎ。溢るる涙ぐつと堪え。

ト、懷より檜扇を取り出し、通盛、縁に膝をついて、扇を握る思い入れあつて、小宰相に放り、もとの座に直り、天を仰ぐ思い入れ。小宰相、檜扇を手に取り、開き見る。

小宰 我が恋は細谷川のまろ木橋。この歌は。

へふみかえされてぬるる袖かなと、詠みもやられず涙を絞り、抑えかねたる思いの檜扇。

ト、これより合方となり、

わらわが今宵お訪ねしたのも、帝、二位の尼君様はじめ御同輩のお許しあつて。それはめでたい、はや三位殿にお伝えせよとの尼君様の御心遣い。また、道中に気をつけよと、仰せ下されし帝の可愛らしい御声がまだ耳に残りおります。通盛すでに三十になるまで、子というものを持たざるに、あはれ男子一人なりと、この世の形見にとおっしゃったお言葉をよそにせず懐胎なしたるこの身の幸せ。

通盛 なんと。

小宰 サ、その喜びもたつた今。

へ一期の涙こぼれ落つ。通盛はつと傍らの若菜の尻目

紛らわし、言葉厳しく言い放つ。

通盛 こは愚かしき女の浅知恵。夫の言葉翻さんと、子を孕んだという嘘偽り。左様な戯言聞くと思うか。

へ夫婦の縁の絆にや、妻は言葉に手にせし扇、思わず籠る女の力、めり、めり、めりと破りかけたる痛ましさ。

ト、小宰相、手にする檜扇を破りかける。通盛、小宰相を見て思い入れ。小宰相、半ば破れた檜扇

に気づき、泣き落とす。若菜、小宰相を見て思い

入れある。よき程に、小宰相、大小を携え、檜扇を拾い上げて立ち、檜扇を縁先に置き、陣門へ行く。時員、陣笠を取り、小宰相に渡し、兩人、思い入れあつて、時員、送り出す。通盛、小宰相を見送り思い入れ。よき程に二重の御簾を下す。小宰相、花道七三に行き、止まり、陣屋をふりかえり、思い入れよろしくあつて、向うへ入る。時員、縁先に残る檜扇を目に留め、懷中にして、上手に入る。よき程に梟の声あつて、御簾を上げる。

へ六甲山月半輪の春の夜更けの山おろし。雲の行き来に月影の光は消えて藪の中、夜陰に紛れ現るる、荒くれ無骨の賤しき姿、所の獵師熊王丸。

ト、熊王丸、下手藪畳より出、陣門近づき、様子をつかがい、指笛にて梟の声を作る。若菜、綿帽子、白無垢の拵えにて、上手障子屋体の内より出、忍んで梯子を下り、陣門に寄る。熊王丸、再び合図の梟の声を作る。

若菜 兄さんかいな。
熊王 兄じゃ。兄じゃ。

ト、若菜、門を開ける。

若菜 兄さん。

熊王 コリヤ。

ト、若菜を制する。若菜、袖で口元をおさえるこなしあつて、熊王丸を陣の内に入れ、若菜、熊王丸を梯子の前に導く。このうち、上手屋体の障子そつと開き、兩人をうかがう様子。このとき、陣門を取り払う。

熊王 コリヤ妹、なにはさて、出かした、ようやった。

若菜 そんなら兄さん、今の間の。

熊王 この場の様子は藪の内、一部始終を見届けおいた。コリヤ妹、そなたまんまと通盛めを垂らし込んだな。

へ兄の言葉のあられもなく、妹は嬉しさ恥ずかしさ。

若菜 ナア兄者人、それにつき、聞いてほしいことがあるわいな。マアちゃつとここにいてくださいな。

ト、熊王丸の手をとり、梯子に腰かけるよう促す。

熊王丸、若菜を制し、

熊王 話したきこと聞きたきことは兄にもある。したが便々ともしておられぬが戦のならい。最前の通盛の体たらく、陣屋の兵も戦用意ままなるまい。御大将、九郎判官様を

はじめとして軍勢一万騎は、鉄拐山の頂に御到着。土肥次郎殿率いる七千騎は一の谷の西に回り、残る三千騎は鶴越の坂落としを駆け下らんと御計略。その先達は俺が役目。俺が帰りを判官様、今や遅しとお待っておるわ。

若菜 そんなら兄さん、判官様は鶴越を。

熊王 月が山の端に消える時は、判官様の軍勢、この陣屋にだれ込み、通盛めを討ちとる計略。そなたの役目も最早や済んだ。よくぞ通盛めを腑抜けにし、陣屋の堅めを緩めやったな。兄の面目、この上なし。妹、出かした。礼を申す。サ、山の端に月の沈まぬうち、疾く疾く陣屋を兄とともに。

へ急き立つ兄をよそ目に見て。

ト、熊王丸、門の方へ歩みゆく。若菜、思い入れあつて、

若菜 アアもし兄さん。ちよつと待ってくださいな。

熊王 待てとは何じゃ。この陣屋に、大事の品でも取り置いたるか。

若菜 いいえそうでは、ござんせぬ。

熊王 コリヤ妹、そのなりは。へ雲間を覗く月明り、兄は妹の姿にびつくり。

若菜 これじゃによつて、わたしや厭でござんす。

熊王 妹、わりや通盛めにたぶらかされたか。

若菜 わたしや、通盛様の女房じゃ。

熊王 何を愚かな、馬鹿々々しい。通盛が戯言に気が上せたか、コリヤ妹。考えてもみよ。通盛めは雲の上人。越前の三位という官位のある平家の公達。我らは無位無官の地下の狩人。わずかな日数を側に置く女をにわかに妻にするなど、真のはずがなからうわエ。

若菜 さりながら、北の方、小宰相様の御懐胎とのお言葉にも動ぜず、私を女房にするとの仰せ、女を騙すお心とは思われませぬ。

熊王 そんな妹、われと兄とは平氏と源氏。敵となつて争うことになるのじゃぞ。

若菜 じゃによつて、厭でござんす。

熊王 ならばその白無垢を脱ぎ捨てて、兄とともに。

若菜 そんならみすみす手に入りしこの身の幸せ、喜びを捨ててこの場を立ち退けと。

熊王 オオサ、それがわが身出世の足掛かり。これより戦で兄が上ぐる功名手柄が、われの幸せを呼び寄せるのじゃ。ナア妹、こと聞きわけて、これだ、これだ。

へと手を合わせ。

ト、若菜に手を合わせる。

月が入るさの山の端に隠る時は、判官様の三千騎が鶴越を駆け下り、一の谷へ攻め寄する手筈。それじやによつて兄と一緒に。

若菜 ソリヤ兄さん、胴欲じゃ、胴欲でござんすわいな。生れて初めて肌身に添わすこの真綿。これも皆、通盛様の真心から。それ捨てて立ち退けとはあまりのお言葉。源氏ばかりが侍ではござりませぬ。帝を奉ずる平家こそ、武門の随一。妹が幸せ、大事と思うて下さるなら、兄さん、これでござんす。

へ妹も兄に手を合わせる。

兄さん、後生でござんす。

熊王 エエ聞き分けのない。真綿御仕着せに目がくらみ、嘘を真と思ひ違ふ愚か者。じゃというて、置いても行けぬわが妹。

へ思案のほかの恋の闇。兄は忠義に心を決し。

そんなら妹、わりやどうしても。

若菜 アイ、厭でござんす。

へ背を向けたれば、山刀、ぐつとつかんで振りかぶり、

ト、若菜、兄に背中を向ける。熊王丸、背負う山刀を手に取り、妹を討つ構え。よき程に奥より通盛、声にて、

通盛 厭とは何じゃ、コリヤ若菜。わしと添うのは厭と言うか。

ト、正面の襖より、通盛、手燭を持ち、直衣姿で出る。若菜、背後に熊王丸をかばい、兩人、梯子のもとに控える。通盛、縁先に立ち、若菜を見下ろし、熊王丸に目を遣り、

通盛 コリヤ若菜、そなた気の多い女子じやな。今こなたの隠しおるこの男は何者じゃ。

若菜 隠すなどとは滅相もない。何で私が左様ないたずら。

通盛 オオ聞こえた。最前時員が申しておった矢文の主、アリヤこの男であろうがな。わが女房に懸想する怪しき男、様子を語れ、なんと、なんと。

へ手燭掲げてうかがい見る。

若菜 何をあなたにもつたいない。三位様、コリヤ、私の兄者人でござりまする。

通盛 ナニ、兄じゃ。兄と言うても憎からぬその出で立ちは、ほかでもない忍ぶ恋路を辿りくる情けの深い兄であろう。

若菜 いいえ、まことの兄者人。これ兄さん、御前も一言申し訳なされませいなア。

へ妹の言葉に詮方もなく大きな体、膝折り、腰曲げ、背をかがめ、両手をついて頭を垂れ、

熊王 お初にお目にかかります。いま、この者の申す通り、俺はこいつの兄めにござりまする。

通盛 そうか、兄か。名は何と申す。

熊王 熊王丸という不束者、以後お見知りおき下さりようならば大慶至極。

通盛 こは屈強の快男児。若菜の兄の熊王丸、生業は何をいたす。

熊王 俺が生業。

へ氣遣う氣配に、通盛が。

通盛 言いくくば言わずともよい。その身なり拵えより推量すれば、この山々谷々の狩人にも相違あるまい。いかじゃ、熊王丸、わが推量は的を射たか。

へ詰め寄る言葉の切っ先を、兄に代わって妹は返し、若菜 アイ。この山間の狩人でござりまする。

通盛 その狩人がこの陣屋へは。

へ何しに來たと矢継ぎ早、応えかねた兄見かねて、こ

れも妹が。

若菜 はい。私から申し上げます。女ながらに出過ぎた真似とお叱りを受けることは存じながらも、三位様、わが兄を御家来衆にお取り立て下さりませ。

へ聞いてびっくりどんぐり眼、熊王丸は怒りに震え、飛び立ちかかる勢いを妹はぐつと押しとどめ。

ト、熊王丸、立ちかけてキツとなる。若菜、熊王丸を制するこなしあつて、

それこの通り、飛び立つ思い、必ず必ずお役に立つと存じます。

通盛 熊王丸とやら、平家の侍になりたいとな。

へ返事やられず南無三宝。応とも言えず、また否と言えぬ苦しき胸の内、むなしく仰ぐ月影は山の端近くかかりける。

ト、熊王丸、きつと思ひ入れよろしく、夜空を仰ぎ、うろたえるこなし。通盛、とくと熊王丸を見て、

そううろたえることとてなし。さりながら、心にかかることありや。

熊王 お取り立て下されば、この身の幸い、心にかかること

とても、ござりませぬ。

通盛 左様なれば、この後は兄妹ともども、この通盛に奉公なすか。

若菜 はい。三位様、私ともども兄者人も。

通盛 相分かった、若菜。こなたの兄の熊王丸。今から通盛が侍に取り立てつかわす。熊王丸、近う。若菜もこれへ。

熊王 ハハア。

ト、梯子の下に控える。若菜、梯子を上り、通盛の下手に控える。

通盛 奉公の手始め。こなたに尋ぬる仔細あり。

熊王 身に覚えのあることなら、なんなりとお答え申し上げます。

通盛 しかば尋ねん。九郎判官義経の軍勢、我が陣の北に聳えたる鶴越に立つ時は、西に下つて浜に出づるや。また、鶴越を駆け下り、この陣屋に攻め寄せるや、推量いかに、熊王丸。

熊王 ハテ知れたこと。鶴越は、人、また牛馬の通う道とてなし。道なき崖を馬にて下るなど愚かなこととござります。

通盛 人、牛馬は通わねども、鹿はいかがじゃ、通うか否か。

どうじゃ、どうじゃ。

へぐつと詰まって熊王丸。

狩人のこなたならば、知らぬこともとよりあるまい。もしまた知らぬと言う時は、こなたの言葉に偽りの影の生ずることもあらん。答えはいかに、熊王丸。

若菜 三位様、兄は口下手。奉公始めに気が張って返事もなかなか。そのお答えはこの若菜が。

通盛 ナニそなたが答えるとな。

若菜 アイ。人や牛馬は通わねど、鹿なれば易きこと。世の中暖こうなれば草の深きに臥そうとて播磨の鹿は丹波へ越え、また、寒うなれば雪の浅きに草葉を食まんと丹波の鹿は播磨へ通う。その道筋はすなわちあれなる鴨越。

通盛 熊王丸、妹は鹿が通うと申すぞ。鹿が通うものなれば、判官きつと鴨越を駆け下て一の谷を攻めるであろう。

熊王 イヤさりながら、鹿と馬は違う獣。これを取り違えては唐土の故事に曰く、趙高が身の誹り。馬鹿なことだア。

通盛 丈三十丈をなすと言ひ、また絶壁の中程には十五丈の岩鼻をひかえる鴨越。馬にて下るは痴れ者の所業。されど、奇策にたけし義経。ウム、鴨越の坂落としじゃな、

熊王丸。褒美をとらす。

ト、直衣を脱ぎ、熊王丸に放り投げる。通盛、下に用意の甲冑姿となって立つ。若菜、驚き、梯子を下り、熊王丸の傍に立つ。熊王丸、山刀を手に悔しがるこなしある。

わが後白河の法皇様より賜りしその直衣、それを褒美に立ち去れ、兄妹。

熊王 こは汚らわしき長袖衣。サテはみすみす謀られしよな。

ト、ドンチャンになり、陣太鼓、鬨の声上がる。

矢が、上手屋体、桜の立木に射込まれる。熊王丸、若菜の手を引き、花道へ向かう。若菜、熊王丸の手をふり払い、

若菜 兄さん、さらばでござんす。

熊王 ウムム。妹までもこの兄を謀りおったか。かくなる上は、妹、覚悟。

ト、若菜と立ち回り。よきほどに、向うより、小宰相、走り出て、陣屋に来る。

小宰 通盛様。源氏の軍勢鴨越より雪崩を打ってこの一の谷へ押し寄せておりまする。

ト、熊王丸、小宰相を見て立ち回りよろしくあつて、若菜、小宰相をかばい、熊王丸の山刀にかか

り、手負いとなる。

熊王 コリヤ妹、なにゆえわが手に。

若菜 小宰相様は、斬られぬ。

小宰 若菜殿。

ト、小宰相、若菜を介抱する。時員、上手より甲胃姿にて出、熊王丸を追いたてる。熊王丸、花道

七三にて、

熊王 エエ妹をわが手にかけしか。

ト、無念の思い入れあつて、向うへ入る。小宰相、

時員、若菜を介抱し、

通盛 若菜、大事ないか。

若菜 アイ。

小宰 なにゆえそなたわが身を捨てて。

若菜 アイ。

ト、合方となり。

通盛様の御胤をお宿しなさる御方様、兄者人に斬らせるわけには参りませぬ。間者となつて入り込みましたが、日頃、通盛様のお側に仕え、お人柄、お心遣いにふれますうち、いつしか募るいたずら心。源氏に与する兄を裏切り、鶯越の獣道、申しあげたも三位様をお助けしたい

心から。ご計略とは知りながら、最前あなたにかき抱かれ、これのような真綿の御仕着せ。

へこの白無垢が冥途の土産。

御方様。

小宰 オイノウ。

若菜 御方様は大事のお体。早くこの場を。

小宰 それじゃと言うて、命かばうてくれた御前をこのままここへは。

若菜 三位様。旦那様。源氏の軍勢攻め寄す前に、少しも早く、御方様を。

へ言葉に通盛涙を絞り、

通盛 若菜、よくぞ申した。それでこそ我が女房。時員、小

宰相を連れて、須磨の陣屋へ落ちのびよ。

小宰 いいえ、通盛様。わらわもともに。

通盛 何を言う、小宰相。そなたの命救いくれた若菜の思い

を無にするか。

若菜 御方様、御息災で。必ずよき御子を。

ト、落ち入る。小宰相、泣き落とす。ふたたびド

ンチャンとなり、鬨の声あがる。

通盛 時員

通盛 時員

時員　ハッ。

通盛　小宰相を頼むぞよ。

時員、命に代えましても、必ずや。

ト、小宰相の手をとり、花道に行く。向うより、

源氏の侍十人、陣屋に押し寄せる。時員、小宰相

の手を引き、源氏の侍と立ち回りよろしく。通盛、

縁先に立ち、

通盛　小宰相、堅固で暮らせ。

小宰　通盛様。

ト、時員の手に引かれ、向うへ入る。源氏の侍、

通盛を取り囲み、よきほどに、向うより、熊王丸、

山刀を手に甲冑姿で出、花道七三に止まり、

鷲尾　越前の三位通盛卿。

通盛　こは訝しき熊王丸が姿。

鷲尾　熊王丸とは昔の名。只今は九郎判官義経様が身内にて、

鷲尾三郎義久という侍。今改めて見参なす。

通盛　これは小賢しき鷲尾三郎。

鷲尾　妹の敵。

通盛　女房の仇。

鷲尾　功名誉はわが目前。

通盛　ならば手柄に討つて見よ。

ト、陣屋の内、源氏の侍と大立ち回りよろしく

あつて、通盛、手負いとなり、よき程に、二重に

上り、義久と立ち回りよろしくあつて、源氏の侍、

下にて陣屋を取り囲む中、通盛、義久、引つ張り

の見得よろしくあつて、幕。

第二幕　淡路の瀬戸御座船の場

役名

通盛妻　小宰相局

通盛乳母子・滝口時員

安德帝

源氏の軍兵六人

大納言乳母

治部卿局

二位尼平時子

越前三位平通盛の霊

本舞台、浅葱幕。浪音にて幕あく。

ト、すぐ八島の謡になり、

へ今ははや、閻浮に帰る生き死にの、海山一同に震動して、舟よりは関の声。月に白むは剣の光、潮に映るは兜の星の影、水や空、空行くもまた雲の波の、うち合い刺し違える、舟戦の駆け引き。

ト、浪音になり、柁につき、浅葱幕振り落とす。

本舞台、向う打ち抜き瀬戸の海原、雲垂れこめる未明の遠見。すべて淡路の瀬戸海上の体。真中に

舞台一杯の御座船、白木の屋形、障子閉しあり。

船べりに仕掛けあり。上手に舳を向け、屋根の軒

口に赤地揚羽蝶の紋の幕を張る。舞台一面に浪布

へぬばたまのよるべは浪に隔たりて、八島遙けき御座船に、疾風のごとく迫りくる、源氏の軍兵。

ト、このうち、上の方より屋形の柱に、矢が射こ

まれ、突き刺さる。上の方より小舟二艘、源氏の

軍兵各三人を乗せ、御座船に漕ぎ寄せる。

軍兵 平家の御座船これにあり。手柄は目前。それ。

軍兵ら オオ。

へ声聞き留めて小宰相、長刀携え。

ト、小宰相、屋形を出て、キツとして見得。

小宰相 平家に仇なす源氏の侍。

ト、船中に乗り込む軍兵と立ち廻り。このうち、

船を廻し、舳、花道の方へ向く。奥より小舟一艘、

時員、大小、弓を手に、靱を背負う甲冑姿でこれ

に乗り、軍兵に梶を取らせ、御座船に漕ぎ寄せる。

時員、弓にて、御座船に乗りこむ源氏の軍兵を射

る。矢に撃たれし軍兵、海中に落ちる。

時員 小宰相様。

小宰相 時員殿か。

ト、軍兵二人を斬り、海中に没する。時員、小舟

の上にて、源氏の軍兵と立ち廻りよろしくあつて、

源氏の軍兵皆討たれて海に沈み、小舟二艘、下手に流れ入る。時員、小舟を御座船の艫の辺りに寄

せさせ、

時員 小宰相様、御無事でござりまするか。

小宰相 オイノウ。

時員 須磨の浦にてお別れ申せし折、どうか御無事で八島までと思いましたが、

へ思うに違うこともなく。

御息災でよろしうござりまする。

小 宰 そなたも堅固で。

へ互いに励ます言葉と言葉。

シテ、三位様は、通盛様は。

へいかがした、御無事であろうと矢継ぎ早、乳母子
きつと口引き結び。

時 員 旦那様は。

へしおたれ顔に立つ波と風に碎けて声細々。

小 宰 なんとした。いかがした。エエもどかしい、時員殿。
チャツとここへ、

へ招き上げ。

ト、時員を招き、時員、舵取りの侍とやりとり
あつて御座船の裏に舟を廻し、御座船に上る。小
宰相、時員の手をとり、艫の辺りに共に住まう。

よくぞ無事で時員殿。こうして命あることこそほんに何
より、何よりじゃわいなア。

へ励ます声に面目なく、頭うなだれ、言葉も失せ。

面をあげや、時員殿。シテ、三位様は御息災か。通盛様
は無事であらうな。コレ。

へ詰まる答えは無念の涙、声震わせて。

時 員 旦那様は。

小 宰 通盛様は。

時 員 見事。

小 宰 お手柄をお上げになったか。

時 員 エエ、

へ見事。

一の谷の陣中にて、見事、討ち死。

小 宰 なんと。

時 員 お果て。

小 宰 エエ。

時 員 お果てなされてござりまする。

へ泣く音聞き留め、二位の尼、

ト、小宰相、泣き落とし、二位尼、屋形の内より
声あつて、

二位 ナニ、越前の三位通盛卿、一の谷にて、討ち死にせし
か。

へ屋形を出ずる尼御前、帝の手を引き御乳の人大納言、
治部卿の局ともどもに船端近く身を寄せ合ひ。

ト、屋形より、二位尼、出て、つづいて、大納言
乳母、安德帝の手を引き出、後に治部卿局、出て、

皆舳の方に住まう。小宰相、時員、舳の方に向き、平伏する。

二位 小宰相が夫、越前の三位通盛卿、武勇優れしと聞き及びしもあい果てたるか。

大納 戦のならいは是非もなし、とは申しながら思えば不憫なことじゃなア。

治部 まして小宰相は今、通盛卿の御子を宿す身の上。いずれ産まれ来る赤子、夫に抱かせてもやりたかつたであらうな。

大納 さてもさても、
治部・大納 ままならぬ世の中じゃなア。

へ声改めて、二位の尼。

二位 時員とやら。

時員 ハハッ。

二位 一の谷の戦、通盛が生涯の有様、小宰相に語ってやりや。

時員 畏まつてござりまする。

へ声励まして時員が、物語らんと座を構え。

ト、居ずまいを正し、

夜も明けやらぬ一の谷、俄かに起こる蹄の響き、関の声。

へ義経の軍勢三千騎、雪崩を打って押し寄せたり。

谷に山彦声荒らげ、一万とも十万とも聞こゆる軍勢を、迎え撃ちたる通盛卿が御働き。ここを先途と鬼神の勢い、さりながら、義経火攻めと矢を撃ち掛け、

へ折しも悪風下ろしきて、屋形、仮屋もたちまちに黒煙なし、燃え上がる。

陣屋の有様。ハヤこれまでと兵ども、海の方へと落ちのびゆく。通盛卿はただ一人、陣にとどまり、東国の荒くれ武者と鎬を削り、容赦もなく敵方の首討ちとつていたりに、アレ、赤地の錦直垂に唐綾緞の公達はまさしく平家の御大将と、

へ詰め寄る敵にとりこめられ。

鷲尾三郎義久と名のり合い、終に討たれて。

ト、ドンチャンになり、関の声あがる。

安德 尼御前、あの声は。

二位 アレあの声はこの御船へ迫りくる源氏の兵。

大納 御上、屋形の内へ。

治部 お入りあそばしませ。

へうちうなずいて安德帝、乳母ともに入りける。

ト、大納言乳母、安德帝の手を引き、屋形に入る。

治部卿局もつづいて入る。

二位 時員、大儀。小宰相、通盛卿の立派な最期。聞いてそなたも安堵したであらう。この後はともに菩提を。

小宰 御言葉、忝う存じまする。

時員 それがしはこれより、旦那様の弔い戦。冥途の御供に遅れぬよう。

二位 左様なれば、戦の餞、盃とらす。時員、屋形の内へ。

時員 ハハア。

ト、二位尼に一礼する。二位尼、屋形に入る。時

員、小宰相に向き、懷より、檜扇を取り出し、

この扇は、旦那様、小宰相様、御夫婦の縁を結ぶ大事の御品。

へ供養もともにと、乳母子が手渡す扇、胸に抱き、

小宰 時員殿。

時員 小宰相様、御方様は大事の御身。御短慮なこと、なされまするな。

ト、屋形に入る。

へ小宰相はただ一人、今生ははや淡路の仇波、夫の魂

魄今いざこと、形見の扇うちまもる。紅、緑、白、

紫、黄に薄紅を加えたる、六つなる色の飾り紐、ほ

どけば開く檜扇の半ば破りし片つ方。

小宰 わが恋は細谷川の丸木橋ふみ返されて

へぬるる袖かな。

お懐かしい、通盛様。

へまた片端の水茎は。

ただたのため細谷川の丸木橋ふみ返しては落ちざらめやは。

へ門院様の御歌なる。

思い出だすは安元の春、

へ上西門院様に御供し、法勝寺の桜符。同じく供奉な

す通盛卿、一目互いに目を交わし、思い、情は胸の

内。はかなく過ぎる年月の、三年を忍び耐えかねて、

恋ぞつもりて文となる、夢の通い路踏み迷う。色に

出にける憂いの影。女院は察して筆執り給い、えに

しを結ぶ御情け。はかなき契り世の乱れ。源氏平家

の合戦に、都を落ちて西海の八重の潮路にただよえ

る憂き身に残る檜扇が二世の縁の夫の形見。

ト、このうち、小宰相、さまざまに思い入れよろ

しくあつて。

小宰 そうじゃ、入道相国清盛公は、音戸の瀬戸にて、西に

入る日を惜しませ給い、扇を向けて中天に日を返せしと

いう。わが夫通盛様も御血筋。わが身に残せしこの檜扇、夫の一念籠るならば、清盛公の扇にならない、返させ給え、通盛様。

へとうち招けば、不思議やな、浪に浮かびし御面影、まざまざと生けるがときおん姿、ゆられゆられて慕い来る。

ト、このうち、小宰相、舳の方に立ち、檜扇を開き、海に向ける。遠見の月、雲を出る。浪音高まり、ドロドロとなり、花道すっぽんより通盛の霊、弓矢、大小、手負いの甲冑姿にてせりあがる。

へ夢か現か波枕、見ぬ行く末も見しことも仮の宿りの幻か。沈み浮かびて見え給う、冑を帶し、兵具いみじき御姿。

ト、このうちに、通盛の霊、御座船へ慕い寄る。

小宰相、通盛に目を留め、思い入れあつて、

小宰 わが夫か、通盛様か。

へ呼べど答えず、魂魄の声仇波に奪わるる。

ト、通盛、舳の方に来て住まう。

小宰 通盛様。どうぞ御声を聞かせ給え。通盛様。

へ扇翳して、うち招けば、不思議や奇特、波だに音を

うち鎮め、

通盛 小宰相。無事であつたか。

小宰 はい。

通盛 武門に生まれし越前の三位通盛が働き見るは合戦の場。とは思えども、これまでの戦において、敵とはいながら、見も知らぬ罪なき者の首討つ悲しさ。戦の習い、是非なきことは知りながら、もののふに生まれたるも前世の報い、我が定め。

へ波白々と明石の浦、須磨の浦より西海の波に漂う憂

き別れ、

通盛 われはこれより弥陀の浄土へ赴かん。さればこそ、そなたに言い置く契あり。小宰相、よく聞け。

ト、合方となり、

通盛 いくさは常のことなれば、日頃はかくして言わざりしが、夫婦は二世の縁とやら。来世も同じ蓮台の。

へ露の契の涙の玉、声をしばって北の方。

小宰 必ずともに。

通盛 三十路となりし通盛が、そなたに残す忘れ形見、夫婦の契り結びし檜扇。

へこの世の絆とねんごろに、わが形見とて忘るるなど、

うちまもり、うちまもり、

通盛 わが北の方、小宰相。

小宰 わが夫、通盛様。

通盛 汝は命捨つべからず、必ず生きよ。

へ淡路の瀬戸の浦波にゆられゆられて消えゆく面影、

この世の修羅の苦しみを離れて霞む御姿、菩薩もここに来迎の成就得脱法の海、忍辱慈悲の波枕。

小宰 わが君様。

ト、このうち、通盛の霊、小宰相、思い入れよろ

しく、浪音となり、通盛の霊、花道すつぽんへ行き、下がる。安德帝、屋形を出て小宰相を見る。

小宰相、舳に立ち、月に檜扇を振りかざす。

小宰 扇の威徳もこと切れしか。通盛様。

へ月うちながめ、扇をままに合掌し、

ト、思い入れ。

小宰 我が身もこの世に思いもなし。一切衆生、皆仏道に入れしめたまえ、

へ今生に別れを告ぐる方便品、尽きぬ迷いの雲晴れてはるかに照らす法の月。

安德 小宰相。

小宰 はい。

安德 いずこへ参る。

小宰 わらわはこれより、月の船にて西方極楽弥陀の浄土へ参りまする。

安德 朕も行こう。

小宰 御上はこの後ともに御息災でおわしませ。

安德 行こう。

ト、舳へ向かう。

小宰 なりませぬ。

へと懷に抱き留め、

ト、安德帝を胸に抱き、思い入れあつて、安德帝を屋形の方へ住まわせる。

小宰 御上、おさらばでござりまする。

ト、舳へ行き、空を仰ぎ合掌する。安德帝、小宰相の後につき、舳へ向かう。屋形の内より、二位

尼の声して、

二位 早まるでない、小宰相。

ト、屋形を出る。後より大納言乳母、治部卿局、出て、二人、安德帝の傍にを住まう。二位尼、舳

の小宰相のもとへ行き、

二位 この世ばかりか未来まで変らぬ夫婦の通盛が思い、無にしてなるものでない。浄土へ向かう通盛の手向けはコレ。

ト、小宰相の上着を脱がせ、海原にふわりとなげる。上着、波に漂う。

時員、これへ。

時員 ハッ。

ト、屋形を出る。

二位 小宰相、そなたはこれにて舟を下り、時員の案内にて、比叡山横川の僧都を頼み、夫通盛卿の菩提を伴う仏の旅路。時員、早や参れ。

時員 ハハア。

ト、小宰相、傍らの長刀で髪を切ろうとする。二位尼、これをとどめ、

二位 早まるでない。小宰相。髪を下ろすは、通盛卿が御子を産みし後。

小宰相 尼御前様。

二位 早や行け。

ト、時員、小宰相とともに御座船を下り、小舟に移る。

安德 小宰相。堅固で暮らせ。

へ誰が呼ぶとはしらの涙の別れ、憂き世の習い、梶音ばかり鳴る海の淡路の島の鳥影に漕ぎ離れ行く。

ト、舳に立ち、後ろに二位尼、大納言乳母、治部卿局、小宰相と時員を見送る。浪音となり、浪幕、船端に寄せ、小宰相、檣扇を翳す。安德帝、合掌するのを柝の頭。皆々きまり、

へあと白波と。

皆々合掌し、浪音にて、幕。

安樂井

薫

東京都在住

〈資料〉

1 国立劇場《歌舞伎脚本募集》募集要項

歌舞伎は、長い歴史を通じ、生き生きとその時代を映し出した魅力的な作品を生み、現在の多彩な上演演目が形成されました。この伝統は、今日の歌舞伎にも受け継がれています。独立行政法人日本芸術文化振興会（国立劇場）は、歌舞伎振興のため、新しい優れた作品を求め、広く一般から脚本を募集します。

●応募規定 ①題材は自由ですが、日本語による未発表の作品（舞踊劇を除く。）とします。

②四〇〇字詰原稿用紙六〇枚以内（場割・役名を含む。）とします。

③応募資格は一切問いません。（劇作家を本業とする方でも応募できます。）

④共作でも差し支えありません。

⑤規定枚数とは別に、作品の〈ねらいとあらすじ〉（四〇〇字×五枚以内）を応募原稿の冒頭に添えてください。他の戯曲・小説・映画等の翻案や部分引用の場合は、〈ねらい〉にその旨を明記してください。

●応募要領 応募に際しては①、②の事項を必ずお守りください。

①原稿作成上の形式

1. 手書きの場合、四〇〇字詰縦書き原稿用紙（A4横向き）と黒のインク（黒のボールペン）を使用して

ください。

2. パソコン等で作成する場合、A4サイズ（横向き・縦書き）縦二〇字×横二〇行の判型と用紙を使用し、片面に黒字で印刷してください。

3. 左下にページ番号を記入してください。

②応募方法

1. 〈応募用紙〉に手書きまたはパソコンで所定事項を明記の上、必ず原稿に添付してください。

※〈応募用紙〉は、日本芸術文化振興会（国立劇場）のホームページ内（脚本募集のページ）から出力をお願いします。ダウンロードできない場合は、送付致しますのでご連絡ください。

2. 原稿の送付方法は、郵送、宅配便（発払い）、データ送信（PDFファイルのみ）のいずれか一つをお選びください。データ送信の場合、下記三の方法に従い行ってください。（持参、メールでの送信、PDF以外のデータ原稿は不可。）

3. データ送信は、〈送信用フォーム〉（ホームページ内の脚本募集のページ）をご利用ください。〈送信用フォーム〉を利用する場合も、必ず上記一の〈応募用紙〉のデータ添付をお願いします。

4. 郵送、宅配便で送付する場合は、応募用紙と原稿を右上部で一括して綴じてください。（クリップ留め可。）

③その他

この応募を通じて取得した個人情報、本募集の目的以外には利用いたしません。

●締切

令和六年一月三十一日厳守。(郵送は当日消印有効、宅配便は当日受付有効。データ送信は当日午後十一時五十九分締切。データ送信の場合、通信トラブルによる締切後の到着を回避するため、余裕をもってお送りください。)

●入選発表

・入選者には直接連絡いたします。

・選考結果及び選考の経緯は、独立行政法人日本芸術文化振興会のホームページ上に発表いたします。

●賞

優秀作 一篇 賞状及び賞金一〇〇万円

佳作 若干篇 賞状及び賞金各三〇万円

奨励賞 若干名 賞状及び賞金各一〇万円

※奨励賞は、入選作品とは別に、将来を期待・囑望される応募者に贈られます。

●選考委員 大笹吉雄・岡崎哲也・竹田真砂子・西川信廣(五〇音順・敬称略)・長谷川眞理子(日本芸術文化振興会理事長)

●注意事項

①以下の応募作品は全て無効になります。

・入選発表の時点で、外部へ発表されている作品(本公募や他の公募において過去に入選した作品やそれらを改訂した作品も含まれます。)

・募集開始から入選発表までの期間が、本応募と一部で

も重複する他の公募に応募した作品(それを改訂した作品も含まれます。)

・著作権の全部又は一部(上演権など)が応募者以外の個人・団体等に帰属する作品。その他、作品の模倣などにより第三者の権利を侵害するおそれのある作品。(これらの場合の権利侵害にかかわる問題は、すべて応募者の責任となります。)

②以下の場合、入選を取り消すことがあります。

・募集要項の条件を満たしていない場合

・履歴詐称などの不正行為が判明した場合

③入選作品について、独立行政法人日本芸術文化振興会(国立劇場)は、入選発表の日から三年以内に限り、自由に決定した時期に、一回のみ無償で上演することができ、かつ、その際台本を無償で出版することもできるものとします。その期間中、独立行政法人日本芸術文化振興会(国立劇場)の初演以前に、他の団体等による上演や出版を行うことはできません。

④上演に際して、加除・変更を行うことがあります。

⑤応募原稿は原則として返却いたしません。また、選考に関する問い合わせには一切応じられません。

●応募先

〒一〇二・八六五六 東京都千代田区隼町四番一号

独立行政法人日本芸術文化振興会 国立劇場制作部歌舞伎課

●問い合わせ先

〔TEL〕〇三(三三六五)六二九四

〔FAX〕〇三(三二六五) 八八七二

〔専用メールアドレス〕 new-kabuki@ntjac.go.jp

メールでのお問い合わせの際には、件名に「歌舞伎脚
本募集について」と必ず記載してください。

上記の募集要項は、独立行政法人日本芸術文化振興会（国立劇場）
ホームページにも掲載しています。 <https://www.ntjac.go.jp/>

2 応募状況

・ 応募総数 一〇四篇（内、共作一篇、二篇応募三名、四篇応募
一名、五篇応募一名）

・ 応募者数 九四名

・ 年齢層 一〇代＝一名、二〇代＝七名、三〇代＝一四名、

四〇代＝一名、五〇代＝一八名、六〇代＝二六名、

七〇代＝一名、八〇代＝三名、九〇代＝一名、

不明＝二名

令和五・六年度国立劇場歌舞伎脚本募集

入選作品集

編集

国立劇場制作部歌舞伎制作課

発行

独立行政法人日本芸術文化振興会

〒一〇二―八六五六

東京都千代田区隼町四番一号

TEL 〇三(三二六五) 六五九〇

印刷

株式会社祥文社

発行

令和七年十月三十一日

※本書の無断転載は堅くお断りいたします。